II. 遺跡調査の概要

かまくらかいどうしゅうへん 鎌倉街道周辺遺跡

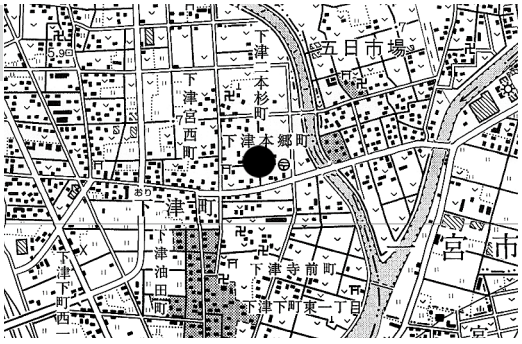
所在地　稲沢市下津本郷町・下津宮西町
（北緯35度15分19秒 東経136度49分52秒）

調査理由　県道名古屋豊山稲沢線建設

調査期間　平成23年4月～平成23年6月

調査面積　830㎡

担当者　鈴木正貴



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　調査は愛知県建設部道路建設課による県道名古屋豊山稲沢線建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成23年４月から６月にかけて実施された。調査面積は830㎡であり、昨年度の調査に引き続く形でＡａ区・Ａｂ区・Ｂａ区・Ｂｂ区・Ｄ区の５調査区に分けて調査を行った。

立地と環境　鎌倉街道周辺遺跡は青木川右岸に所在する南北約3.0km、東西約1.5kmの範囲にわたる広大な遺跡である。青木川によって形成された自然堤防およびその後背湿地に立地しており、標高は約６～７mを測る。昨年度の調査では古代末から中世の遺構・遺物が濃密に展開していることが明らかになり、その豊富な内容から、下津宿あるいは尾張守護所下津の一部に相当すると考えられ、中世都市の具体的な様相を知る上で重要な成果となっている。

調査の概要　今回の調査では、昨年度と同様に、古代末から中世までの様々な遺構や遺物が確認された。遺構は激しく重複する場合があり、時期区分を整理することは容易ではない。調査区ごとに概要を説明する。

Aa区　Ａａ区では２面調査を行い、１面で12世紀～15世紀、２面で10世紀～12世紀の遺構や遺物が確認された。両面とも柱穴が多数検出され、掘立柱建物跡が複数建てられたものと考えられる。10Ａ区で確認された溝に囲まれた区画が屋敷であったと推測される。

Ab区　Ａｂ区では、12世紀～13世紀頃の大型土坑と15世紀頃の柱穴が発見された。

Ba区　Ｂａ区では５面調査を行ったが、概ね３時期に整理される。15世紀では、深さ1m以上の大溝が東西方向に２条平行して検出された。通路および屋敷を構成したものと推測される。14世紀～15世紀前半では、長さが1m前後の長方形の土坑が点在した。12世紀では、竪穴状遺構と柱穴群が確認されたが、その性格は不明である。

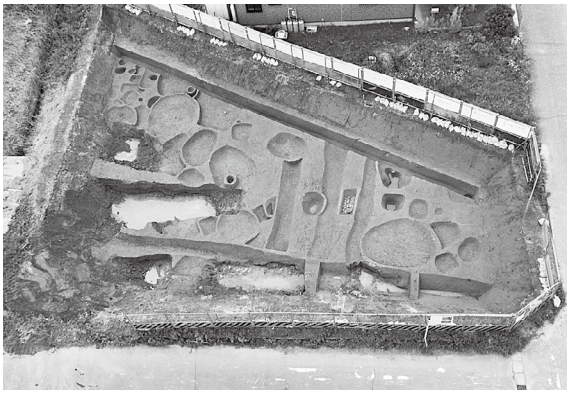
Bb区　Ｂｂ区では２面調査を行い、１面で14世紀～15世紀の東西溝１条と南北溝３条、２面で12世紀～15世紀の南北溝２条などの遺構が確認された。この地点では、屋敷割は少なくとも２回は変更され、多数の柱穴の存在から屋敷の中に掘立柱建物跡が存在したと想定される。２条の溝の間には円礫をきれいに敷き並べた石敷遺構が存在する。

D区　Ｄ区では４面調査を行い、１面では昨年度の調査で鎌倉街道と推定された幅が約10mの高まりの延長部が南北に伸びる形で確認された。この道路状遺構は15世紀中頃までの柱穴などを整地して作られたこと、少なくとも18世紀には畑の耕作土が堆積して畝と思われる小溝が掘削されたこと、道路面付近で16世紀の遺物も出土したことから、この部分の道路状遺構は15世紀中頃以降16世紀を中心とする時期に機能していたと想定される。

２面～４面では道路状遺構以前の遺構が多数確認され、地区により遺構の様相が異なっている。調査区東部では柱穴が多く展開し、掘立柱建物が建っていたと推測された。中央部では深さが30cm程度の長方形土坑がいくつか発見され、長方形土坑1222ＳＫの床面土



Aa区１面全景



Bb区１面全景



Ba区５面全景



Bb区２面全景

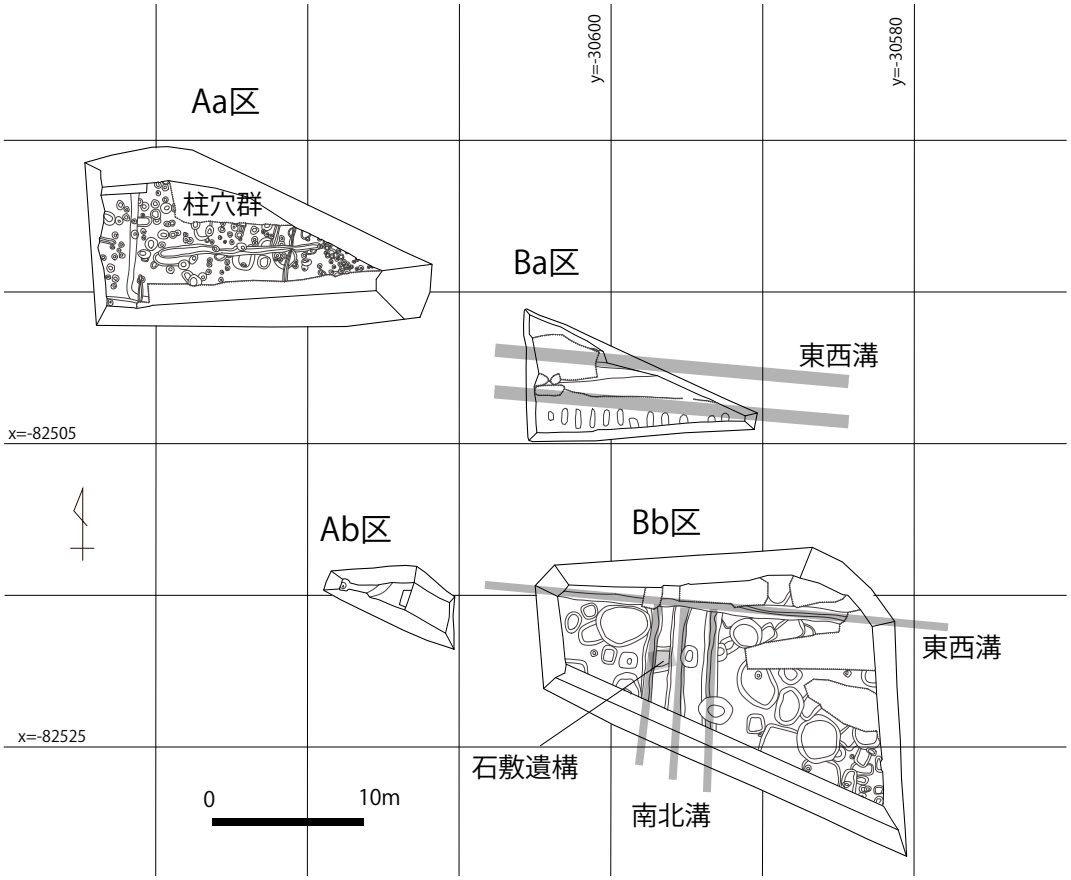


図１　A･B区１面遺構図

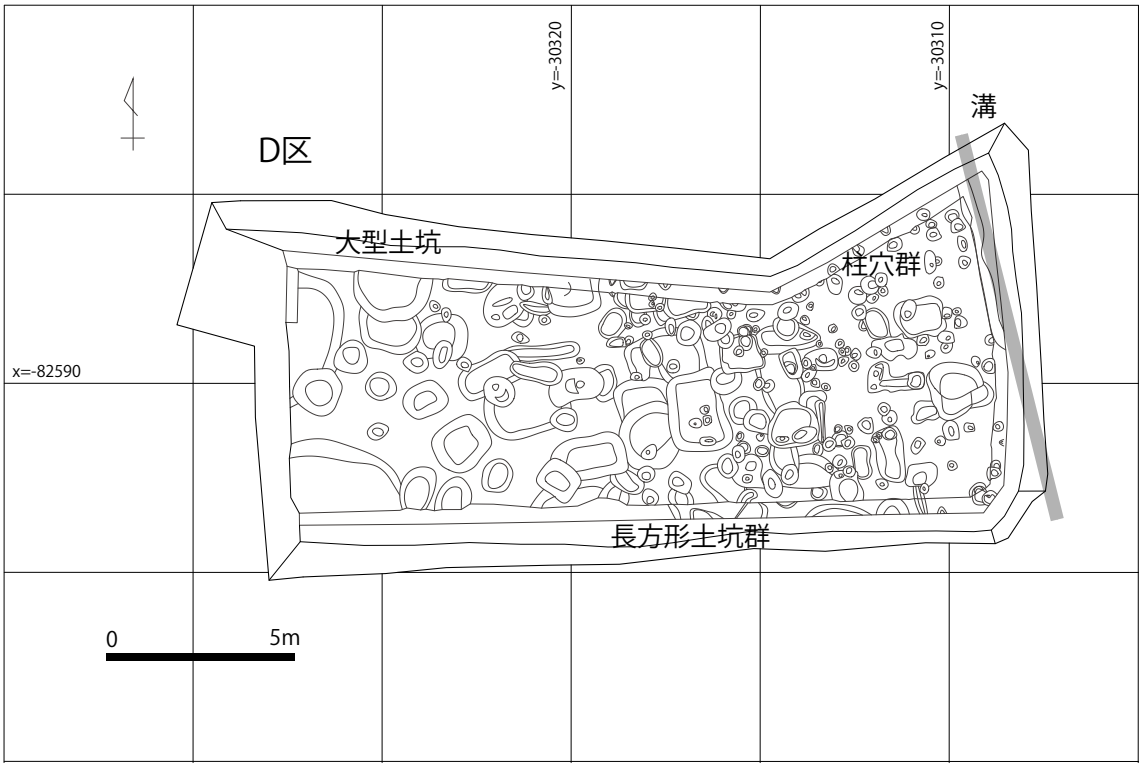
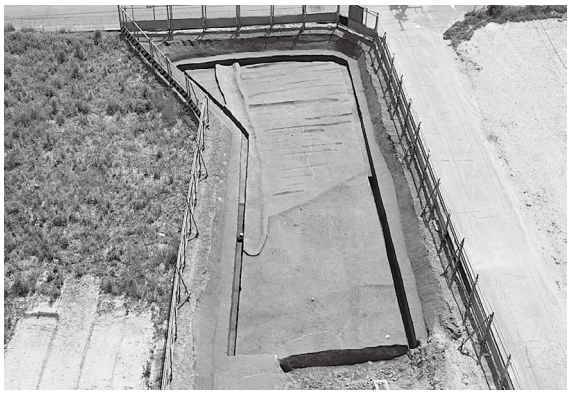
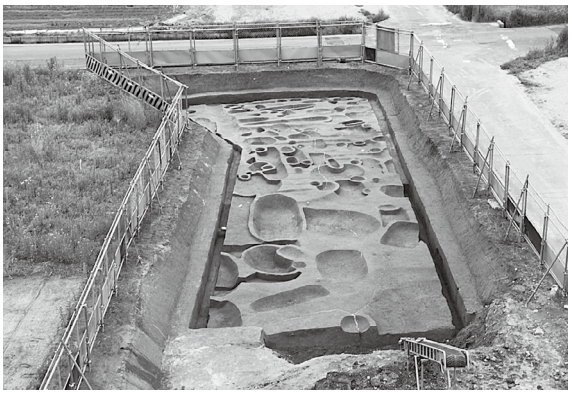


図２　D区３面遺構図



D区１面全景（上半が道路状）



D区２面全景



D区４面全景

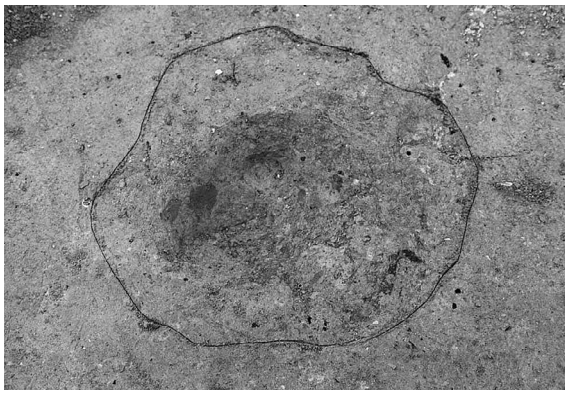


1490SK土層断面


1320SK 遺物出土状況


2123SK 礫出土状況


167SP 山茶碗出土状況


1306SK 焼土検出状況

壌の水洗篩別作業の結果、鍛錬鍛冶工程の際に発生する鍛造剥片や粒状滓や鉄滓などが抽出された。また、中央部から西部にかけては、中型から大型の土坑が繰り返し掘られ、土坑からは陶磁器・土器類の他に、鉄滓や鋳型片、焼土壁や炭化材などが多く出土している。炉跡などの生産遺構そのものは確認されなかったことから、D区付近で金属製品を生産が行われたものと推測される。この他に、東端部で南北溝１条が、西部で井戸２基が検出されている。

ま と め

今回の調査では、狭小な調査区のために確認された遺構群も限定的であり、昨年度調査区の中に位置づけていかないと正しく理解できないだろう。その中にあって、A区・B区では溝と掘立柱建物跡を中心とする遺構群があり、D区ではそれに金属生産関連遺物などが含まれる土坑群が加わると整理できるだろう。A区・B区ではやや土師器皿が目立つことなどからみて、有力者の屋敷や寺院などの可能性も考えられよう。一方，D区では遺構密度は稠密であることなどを加味すると、商職人が盛んに活動した場所とみることができよう。そして、D区では、これらの遺構を廃して道路状遺構が造成され、それ以降はそこでの活動が低調になったことにも注目しておきたい。

今後は、このような様相の相違を遺跡全体の中にどのように位置づけて評価していくかが課題となるだろう。（鈴木正貴）

清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

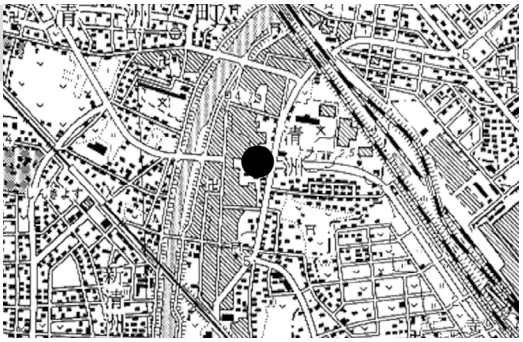
所在地　清須市清洲地内
（北緯35 度02 分58 秒 東経136 度06 分57 秒）

調査理由　街路新設改良工事（住宅基盤整備）3・4・616助七西市場線

調査期間　平成23年９月～平成24年１月

調査面積　1,610 ㎡

担当者　鈴木正貴



調査地点（1/2.5万「清洲」

調査の経過　調査は愛知県建設部道路整備課による県道助七西市場線建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成23年９月から平成24年1月にかけて実施された。調査面積は1610㎡であり、昨年度調査区の西側から順にＡ区・Ｂ区・Ｃ区の３調査区に分けて調査を行った。

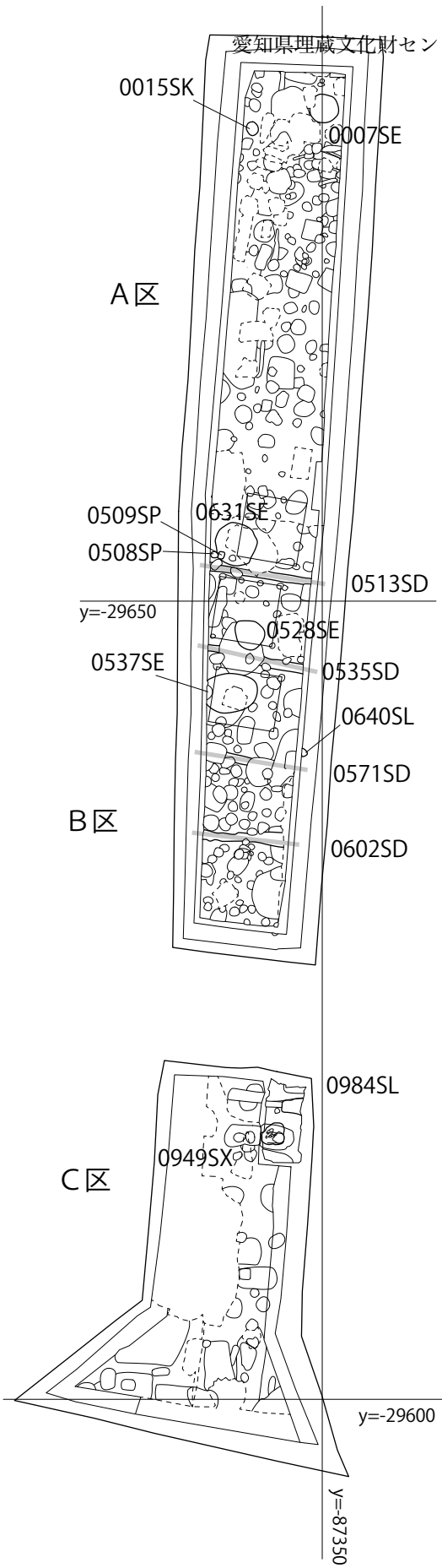
立地と環境　清洲城下町遺跡は五条川によって形成された自然堤防および後背湿地上に立地する。戦国時代から江戸時代初頭までの清須城とその城下町を中心とする遺跡であるが、古墳時代の集落跡から江戸時代の宿場町まで様々な時期の遺跡が複合している。調査地点は、五条川左岸で清須城のほぼ真南の位置にあり、城下町期後期の中堀の外側、城下町期前期の武家屋敷域の最南端に相当する。

調査の概要　今回の調査では古代から近世までの多様な遺構や遺物が重複した状態で確認され、地点により３～５面に分けて発掘調査を行った。これらは大きく平安時代、鎌倉時代～室町時代、城下町期、宿場町期の４期に大別されるが、遺構の大半は城下町期前期後半～城下町期後期に属するものであった。この段階で繰り返し遺構の掘削と改変が行われていたと考えられる。

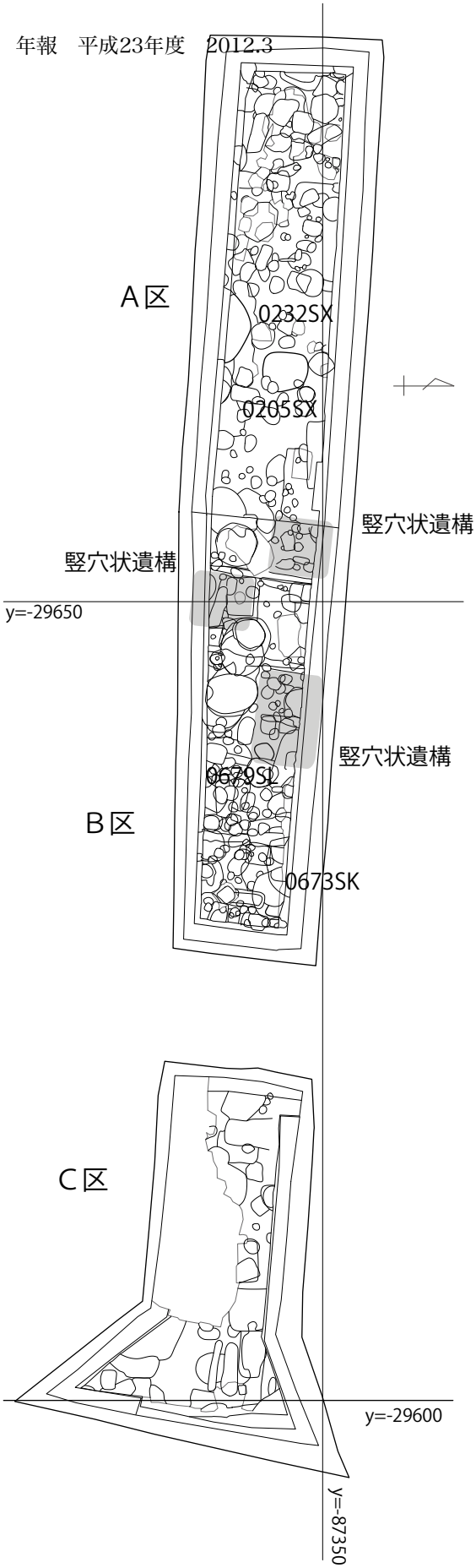
調査区は東西方向に細長く設定されており、基盤層のあり方が地点により異なっていた。Ａ区西半部から昨年度調査区にかけては厚く中粒砂が堆積しており、これが平安時代から室町時代にかけての流路と推定され、そこから東は徐々にシルトなど安定した自然堤防の堆積が確認された。城下町期にはこの流路は埋積し『清須村古城絵図』に描かれた河道に移動したものと思われる。以下、時期ごとに遺構の概要を報告する。

平安時代　Ａ区東半部からＣ区にかけて竪穴建物跡約10棟が確認された。黄褐色粘質シルトなどを地山とする部分に分布し、一辺が3m前後の規模を持つ隅丸方形を呈する。0450SIなどのように主柱穴が検出されるものもあるが、概してカマドや炉などの内部施設は不明なものが多い。須恵器や灰釉陶器あるいは土師器片が出土し、8世紀から10世紀に属するものと思われる。これらは、田中町地区に所在する古墳時代から平安時代までの集落縁辺部に相当する遺構群と想定される。かつて本調査区南東部で出土した墨書灰釉陶器とそれに伴う掘立柱建物跡に関連する遺構・遺物は明瞭には確認されていない。

鎌倉時代～室町時代　Ｃ区東部で区画溝２条と井戸１基などが検出されたが、その他の部分では遺物は認められるものの顕著な遺構は今のところ確認できていない。溝（0994SD・0998SD）は幅が1m前後の規模を持つ東西方向に走るもので屋敷などを区画するものと思われる。井戸0999SEは溝と重複する形で検出された方形縦板組横桟支柱式井戸で、最下部で曲物筒が２段重ねられ水溜としていた。時期は13世紀に属する。Ｂ区北西部からＡ区南東端に走るやや規模が大きい溝はわずかに蛇行しながら走り、流路または水路と思われる。


0015SK
0007SE
A区
0509SP
0631SE
0508SP
0513SD
y=-29650
0528SE
0537SE
0535SD
0640SL
0571SD
B区
0602SD
0984SL
0949SX
C区
y=-29600
y=-87350

1面遺構図


A区
0232SX
0205SX
竪穴状遺構
竪穴状遺構
y=-29650
竪穴状遺構
0679SL
B区
0673SK
C区
y=-29600
y=-87350

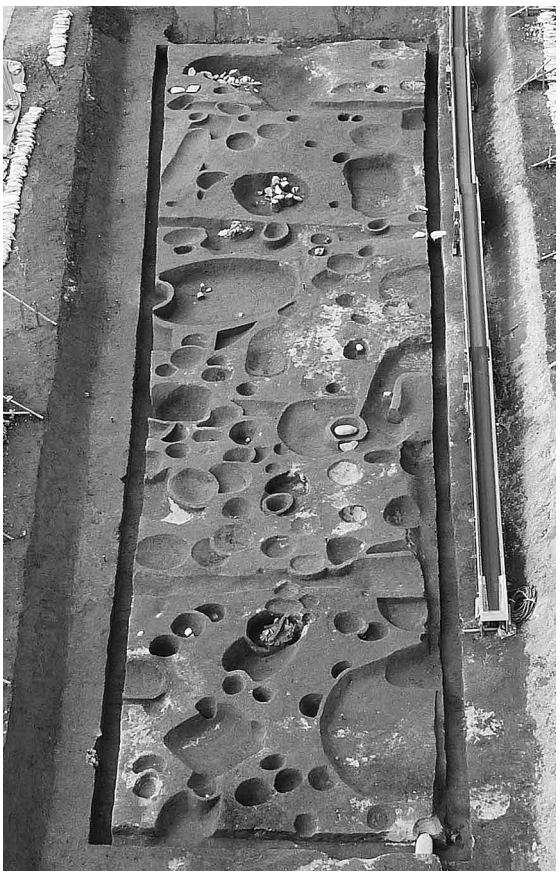
2面遺構図



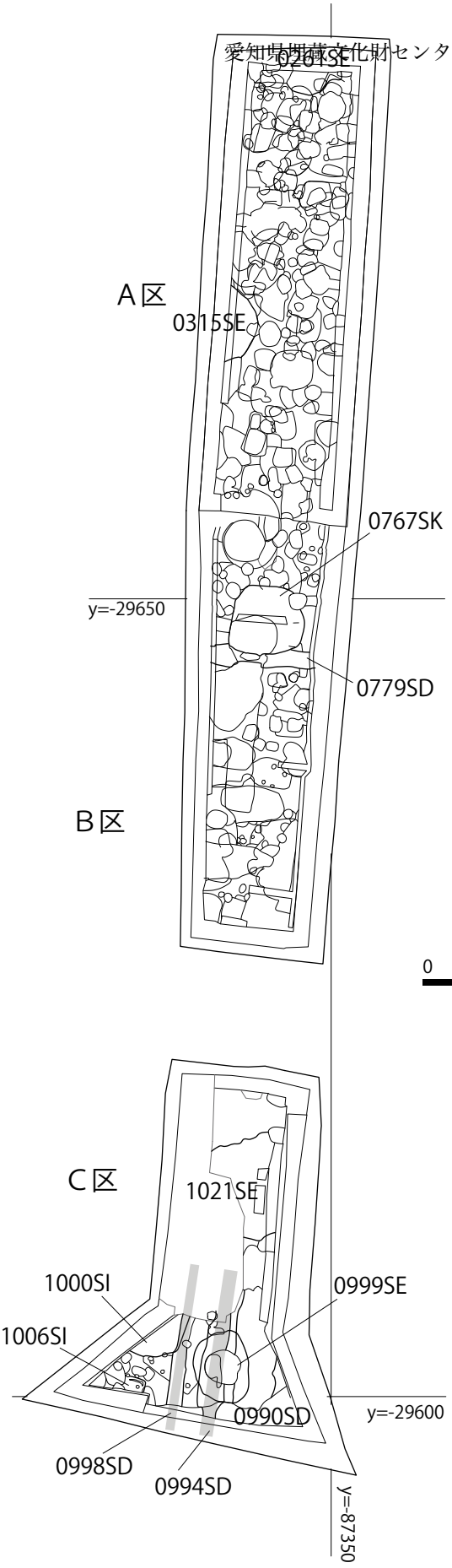
遺跡遠景　南から



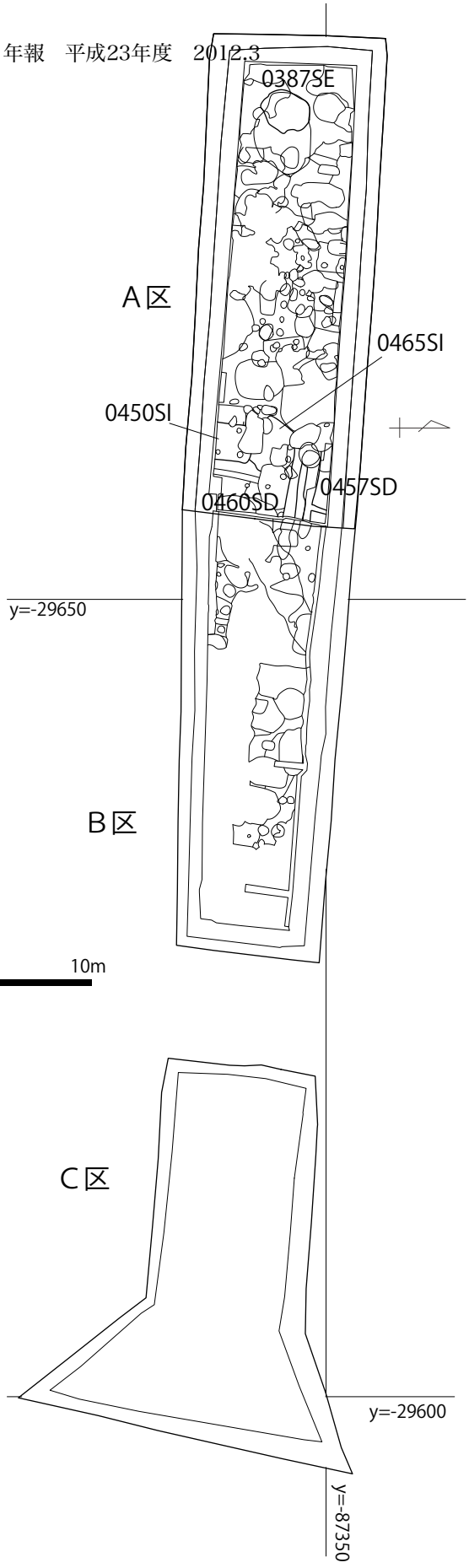
A区２面全景



B区１面全景


0261SE
A区
0315SE
0767SK
y=-29650
0779SD
B区
C区
1021SE
1000SI
0999SE
1006SI
0990SD
y=-29600
0998SD
0994SD
y=-87350

3面遺構図


0387SE
A区
0465SI
0450SI
0457SD
0460SD
y=-29650
B区
C区
y=-29600
y=-87350

4面遺構図

城下町１期（前期前半）　A区東半部からC区にかけて溝や堀などが認められたが、その他の遺構は不明な部分が多い。A区北東部の溝0457SD・0460SDやB区中央の溝0779SDは幅がやや狭いが、C区東部の堀0990SDは幅が約３mを測るものであった。堀0990SDは断面V字状であり、方形の武家屋敷を囲む堀の一部と想定される。ただし、城下町期前期後半？の円形結物筒式井戸1021SEに切られ、その先の行方が不明である。これらの遺構は大窯第１段階の瀬戸美濃窯産陶器などの遺物が出土したことから、16世紀前葉を主体とする時期に属する。

城下町２期（前期後半）～城下町３期（後期）　今回の調査では主体となる時期で遺構の重複は激しく、現段階で２期と３期の峻別も含めた時期区分はできていない。溝・井戸・掘立柱建物跡など屋敷を構成する遺構の他に、方形竪穴状遺構・炉跡・長方形土坑・大型土坑・円礫埋設遺構など特異な遺構が多く認められる。

B区１面調査では明瞭な形で町屋と思われる遺構群を確認することができた。溝513SD・535SD・571SD・601SDは5～6m間隔で北北東―南南西方向に平行して走る溝で、その間に掘立柱建物跡と井戸（631SE・528SE・537SE）が検出された。おおよそ南北に細長い屋敷が東西方向に並ぶ短冊型地割が形成されており、町屋であったと想定される。これらの遺構群は出土遺物と天正地震の痕跡との関係などから城下町期３期に属する。A区およびC区ではうまく屋敷割が確認できなかったが、特にA区の井戸（261SE・315SEなど）の配列などからみて、同様の町屋が存在したと推測される。

各屋敷では、井戸や建物跡の他に炉跡・長方形土坑・円礫埋設遺構などが展開する。炉跡またはそれらしき遺構は数基存在するが、0640SLは黄灰色粘質シルトを整地して作られたもので、上部の堆積物から微小鉄片などが出土した。0640SLの下位にも数面の整地面が認められ、そのうち１ヶ所の別の地点で炉跡（0679SL）が検出されており、繰り返し作業面が造成されて炉が構築されたものとみられる。下位の整地面は浅く掘り凹められた竪穴状遺構の床面となっており、0640SLも本来は竪穴状遺構の内部に作られたものだろう。炉跡とはやや離れた場所で円礫埋設遺構が存在する。区画溝に接する位置で２基並ぶケースが多く、0508SPの円礫表面には紫褐色の付着物が確認された。長方形土坑の内部には焼土・炭化物が互層状に多量に堆積していた。周囲で椀型鉄滓や炉材・焼土・炭化物・少量の鋳型片など金属関連遺物が多量に出土しており、鍛錬鍛冶工程を中心とした金属加工を操業していた屋敷と考えられる。また、C区では、床に厚くシルトを貼付け一部が被熱した遺構0949SXがある。このシルト面は合計４回以上造り直されており、鋳造に関連する遺構の可能性が考えられる。

これらの遺構群の下層では、繰り返し炭化物が入る長方形土坑など、多くの遺構群が構築されており、最古段階に位置づけられるものとして大型土坑数基（0767SKなど）が存在する。一辺が５mを超える隅丸長方形プランを呈し、椀型鉄滓や焼土・炭化物が集中して廃棄される部分の他は地山班土で埋め立てられていた。これらの遺構からは大窯第２段階以降の遺物が出土しており、城下町期２期に属すると思われる。

天正地震の痕跡　今回の調査では、旧流路埋積部を中心に地震による液状化現象の痕跡が多数発見されている。下位の遺構は埋土が揺らされたWeb構造が認められ噴砂が貫くものが多く、上位の遺構はWeb構造が観察されず噴砂上に構築されるものが目立つ。時期の判断は慎重を要するが、これらの液状化現象をもたらした地震は天正13年11月に発生した天正地震と推測され、これを基準に時期区分を行うことも可能である。ただし、天正地震を境に大きく遺構配置が変更された形跡は認め難い状況であることから、城下町期２期からひきつづき



0450SI



C区３面全景



1000SI・1006SI



0999SE上部



中世の水路？



0999SE水溜部

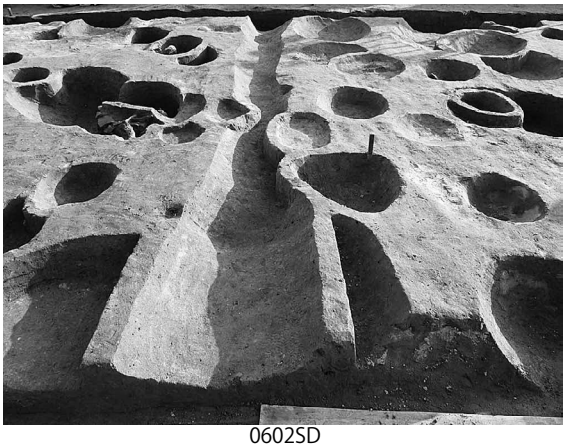


0315SE土層断面

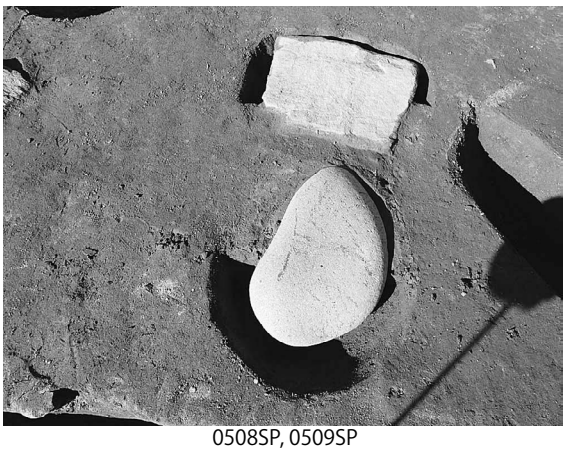


0990SD


竪穴状遺構


0602SD


0640SL検出状況


0508SP, 0509SP


0640SL土層断面


0949SX


0205SX遺物出土状況


0205SX土層断面



0767SK



0673SK土層断面



B区竪穴状遺構群



0637SK出土状況



地震痕土層断面



0015SK出土状況

３期にかけても鍛冶職人らが集中して操業していたと考えられる。

宿場町期　A区西端部で常滑窯産陶器甕を埋設した土坑0015SKや井戸0007SEなどが確認されたが、他の地点ではほとんど遺構は存在しなかった。調査区は美濃街道に面する屋敷の裏手であったといえる。遺物には「秋二焼」碗など18～19世紀の陶磁器類が出土した。

ま と め　今回の調査では、城下町期２期以降の金属製品生産に関わる遺構群が確認され、少なくとも城下町期３期（後期）では短冊型地割の町屋内で鍛錬鍛冶工程などが行われていたことが想定される。前期清須城の武家屋敷外縁部でこのような遺構群が検出されたことは、清須城下町の発展過程を考察する上で重要な成果となるであろう。（鈴木正貴）

大平本城（おおだいらほんじょう）

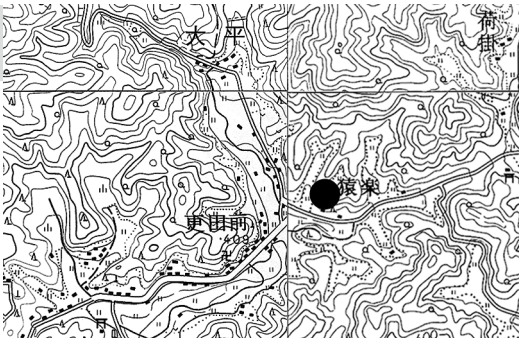
所　在　地　豊田市大平町下屋敷
（北緯35 度15 分7 秒 東経137 度14 分46 秒）

調 査 理 由　急傾斜地崩壊対策事業

調 査 期 間　平成23 年10・11月

調 査 面 積　310 ㎡

担　当　者　池本正明



調査地点（1/2.5万「多治見・猿投山・猿爪・小渡」

調査の経過　急傾斜地崩壊対策事業に先立つもので、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

立地と環境　大平本城跡は現在の大平の集落を南西に見下ろすような尾根上に位置している。城郭は南側に伸びる尾根の先端部を残して堀切を設定した立地となっている。現存しないが、北西側の尾根続きにも堀切が存在した事が知られており、二つの堀切で丘陵の南北を区切って主郭とした構造となっている。主郭の東側は最大高が4mを超える土塁が設定されており、西側に強い方向性が観察できる。なお、北側に展開する谷の対岸、西側に伸びる丘陵端部には大平姫城跡が位置している。両者の位置関係から、大平姫城は大平本城と一連の存在であった事も推定されている。

この城跡は、『小原村誌』によれば、大内下総守久政の居城で、文正元（1466）年に松平信光の攻撃により落城したと記述されている。しかし、南西部の堀の形状などに戦国時代から登場する構造も指摘されており、15世紀以降も城郭が存在したものと評価されている。

調査の概要　今回の調査地点は、城郭の南西部に該当する。調査区では二条の土塁（11A区004SA・11C区006SA）とこれに挟まれた三か所の平坦面を確認した。平坦面は丘陵側が急峻な斜面となっている。このうち、上段と中段については城郭の時期に存在した事は明らかには出来なかったが、下段の平坦面は城郭の存続時期に存在したとの考えられる。

この平坦面はやや規模も大きく、西側を整地により拡張している。また、南側の土塁（11A区004SA）の端部がわずかに屈曲し、下段の平坦面を回り込むような形状をとる事も確認できる。ここからは近世の遺構（11A区002SK）も確認できるが、16世紀代の土器小片や、スサを混入する焼土塊や炭化物などを多量に含む大型土坑が１基（11A・B区003SK）検出されている。

調査区南北で確認できた土塁は、断ち割り調査の結果いずれも基底部に若干の整地を加えて地山土を盛り上げた構造で、残存状況の良好な南側の土塁（11A区004SA）は全長約14mを確認した。

出土遺物は大半が16世紀に属する。ただし、15世紀代に遡る資料も一部に含まれ、下段の平坦面の整地層からは16世紀後半頃の擂鉢片が１点出土している。前者は『小原村誌』に記される伝承、後者は遺構の観察所見とそれぞれ年代的に一致している。

（池本正明）



調査区遠景　（南から）



11A区全景　（南から）



11A区004SA断面　（西から）

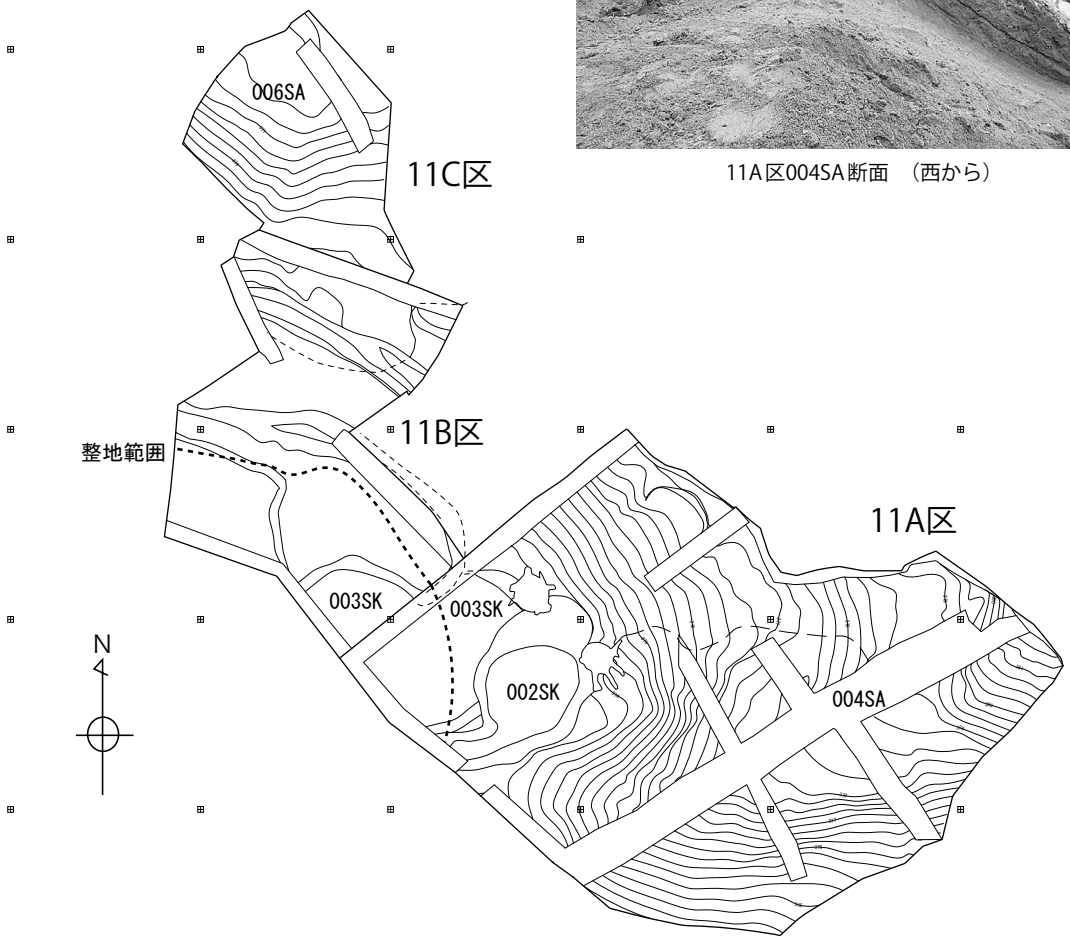


図1　大平本城全体図（1:200）

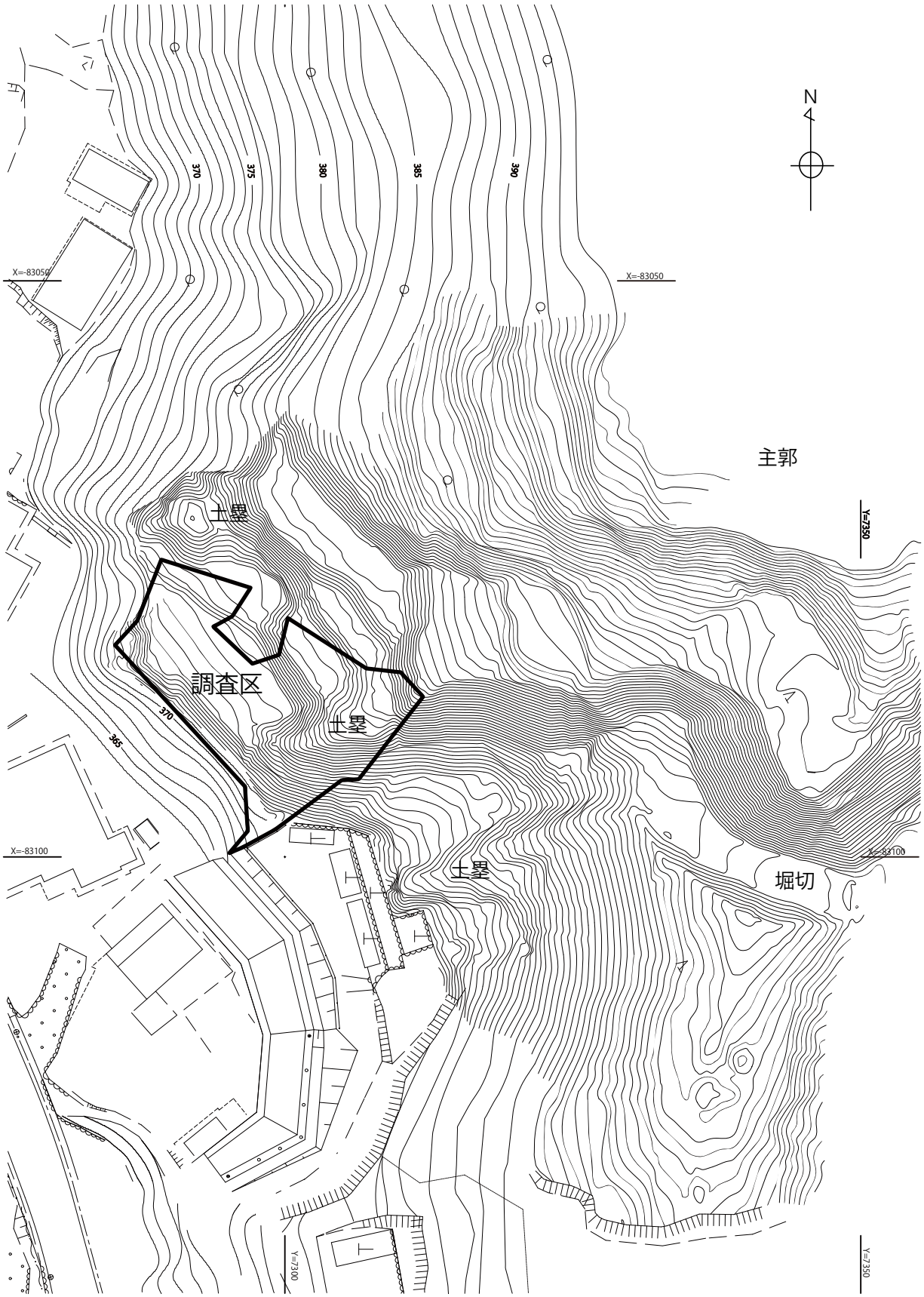


図2　調査区位置図（1:500）

車塚（くるまづか）遺跡

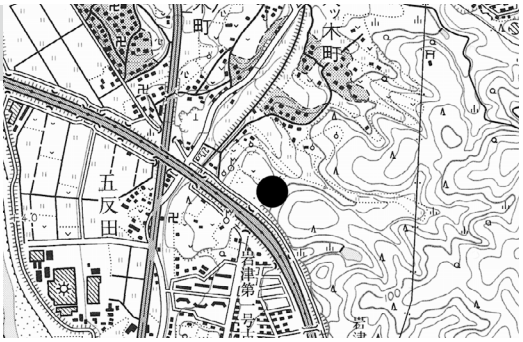
所　在　地　岡崎市岩津町車塚
（北緯35度0分46秒 東経137度10分23秒）

調 査 理 由　道路改良工事（主）岡崎足助線

調 査 期 間　平成23年6月～8月

調 査 面 積　800㎡

担　当　者　池本正明



調査地点（1/2.5万「豊田南部」）

調査の経過　調査は県道岡崎足助線改良工事に先立つもので、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。なお、車塚遺跡の調査は平成20年度からの４年間の継続業務として実施しているが、本年度で完了となる。

立地と環境　車塚遺跡は矢作川左岸に張り出す標高約40m～50mの丘陵端部に位置する。丘陵の南側縁辺部には於御所遺跡が存在し、遺跡の背後の丘陵上やその周囲には岩津古墳群・天神山古墳群・車塚古墳群・八ツ木古墳などの古墳が存在している。

調査の概要　本年度の調査区はA～C区の３地区で、11A区は09区の東側、11B区はその西側、11C区は10区の西側に位置している。以下、調査区毎に概要をまとめる。

11A区は09区の東側に位置している。調査区は長方形を呈する。近接する09区の東側は弥生時代後期～古墳時代初頭に属する竪穴建物と、古代を中心とする掘立柱建物が分布するが、11A区もほぼ類似した内容となる。このうち調査区南側で検出されたやや大型の竪穴建物（112SI）は注目できる。弥生時代終末期に属するもので、東側の隅が調査区外となるが、一辺約10m程度の隅丸正方形を呈する。また、これを切るやや大型の掘立柱建物もやはり東側が調査区外となるが、短辺は約8.0m、長辺は約10.5mまで確認できた。

B区は09区の西側に位置している。調査区は三角形を呈する。近接する09区の西側は遺構が希薄な部分となっており、11B区もこれとよく似た状況となっている。確認できた遺構は、現代の畑の区画溝とほぼ重なる溝（002SD）とこれに直交する溝（001SD）である。いずれも近世以降に属する。

11C区は逆L字状を呈し、10区の西側に位置する部分を11Ca区、ここから西側に伸びる部分を11Cb区に分割する。10区では7世紀代と考えられる古墳８基が集中して確認されているが、これに接する11Ca区では古墳の石室基底部と考えられる集石（060SK）が1基のみ検出できたに過ぎず、これに代わって弥生時代終末期の方形周溝墓が確認できた。方形周溝墓は10区の北側でも一辺のみ確認されているが、本年度はこれに連続する部分と新たに２基の方形周溝墓を検出した。方形周溝墓は08区南側でも2基確認されており、11Ca区北側周辺に方形周溝墓の分布域が存在していたものと考えられる。

ま　と　め　車塚遺跡の発掘調査は４年度に渡ったもので、遺跡の所在する丘陵の頂部を南北に縦断する総面積9640㎡を実施している。検出された遺構は弥生時代～古代が主要な時期になっており、大まかには北側斜面の08区と09区の北側が居住域、南側斜面の09区南側と10区、11Ca区が墓域と考えられ、南側に面した緩斜面上部に古墳と方形周溝墓が分布域を異にしていることが確認できた。一部の方形周溝墓の周溝からは、最上層で奈良時代頃の須恵器が出土している。古墳群を築造する段階では方形周溝墓の溝が完全に埋まった状態ではなく、古墳の築造時にこれらを避けたものと考えられる。（池本正明）

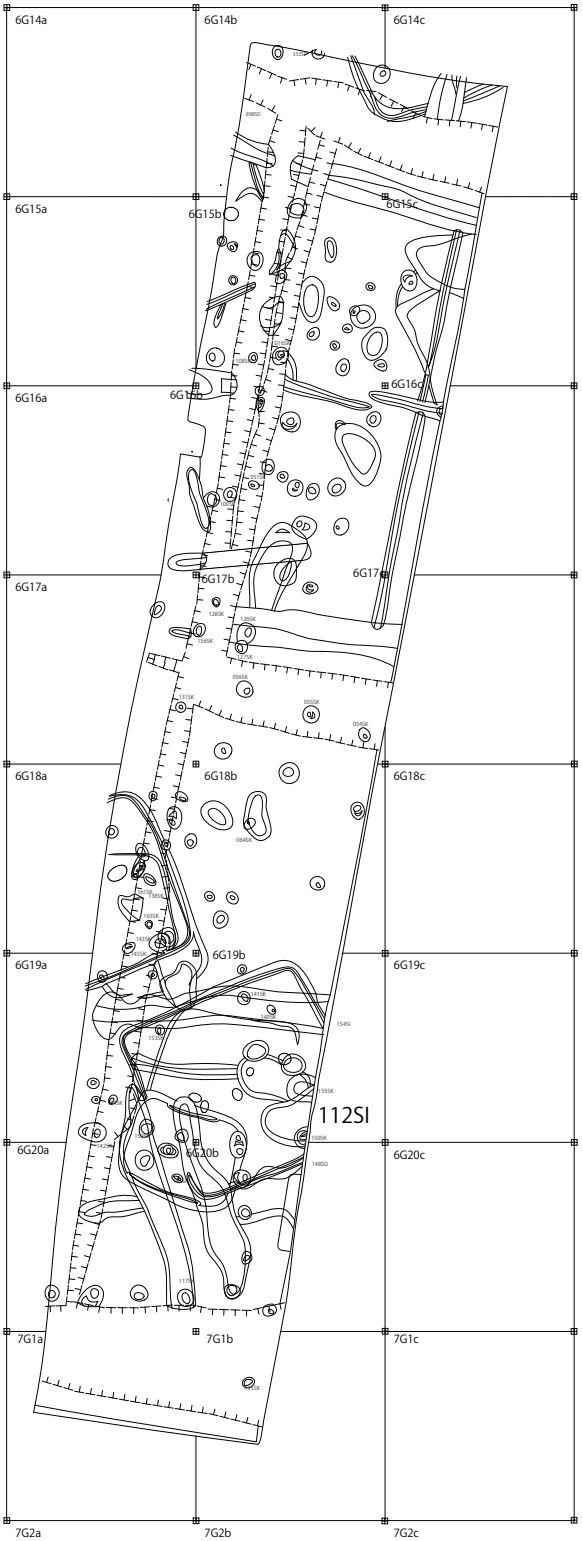


図 1　A 区全体図（1:200）

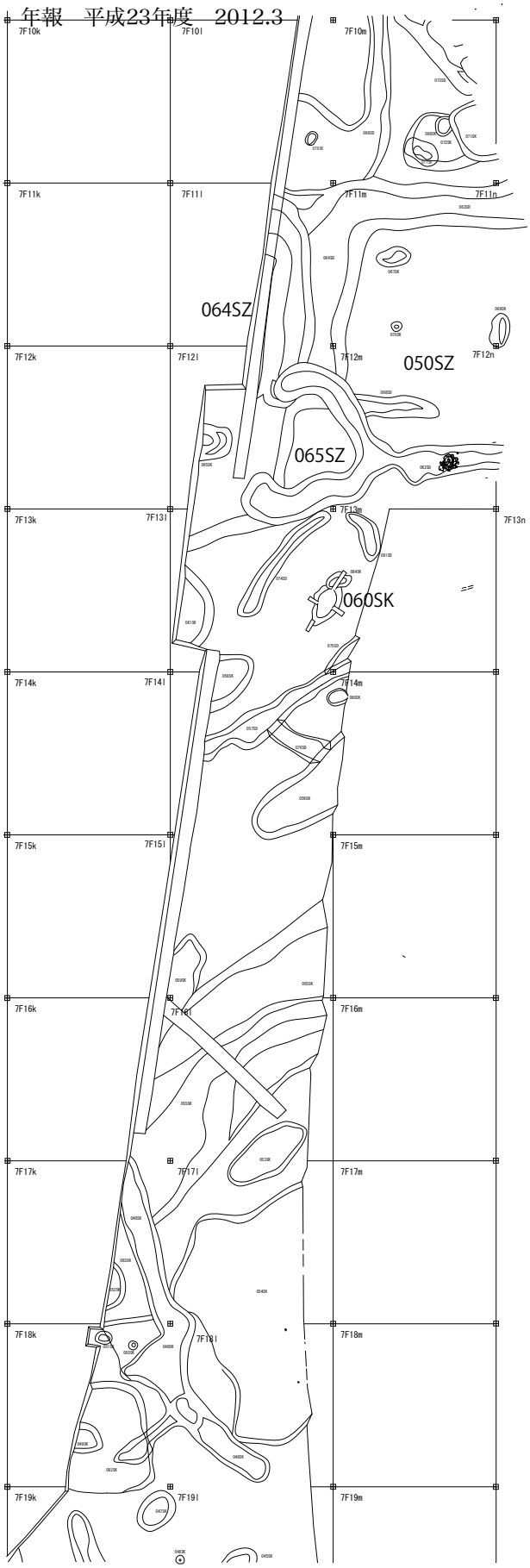


図 2　Cb 区主要部分図（1:200）

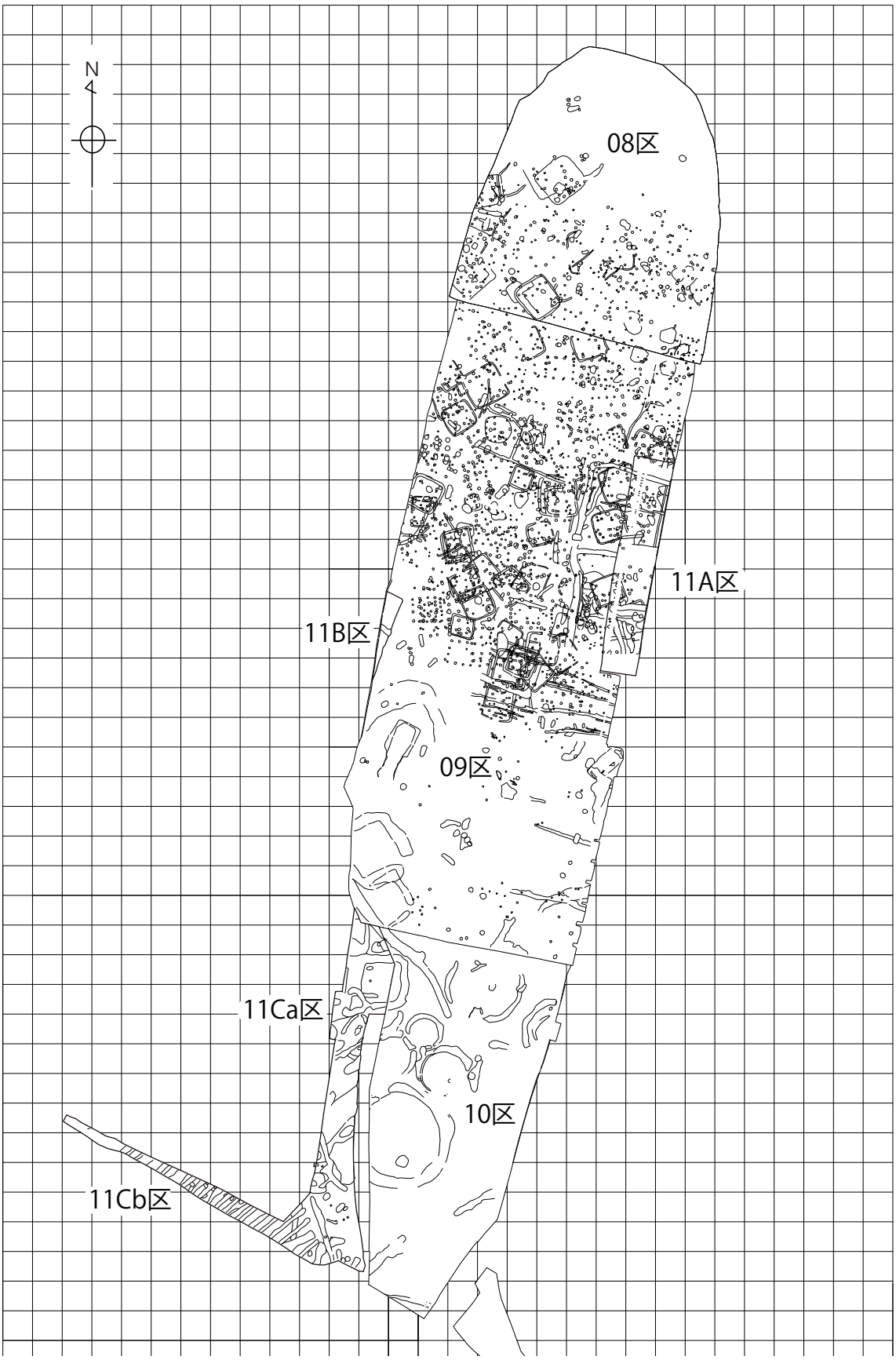


図 3　調査区全体図（1:1000）



A 区全景　（南から）



A 区 112SI　（西から）



A 区掘立柱建物　（西から）



B 区全景　（北から）



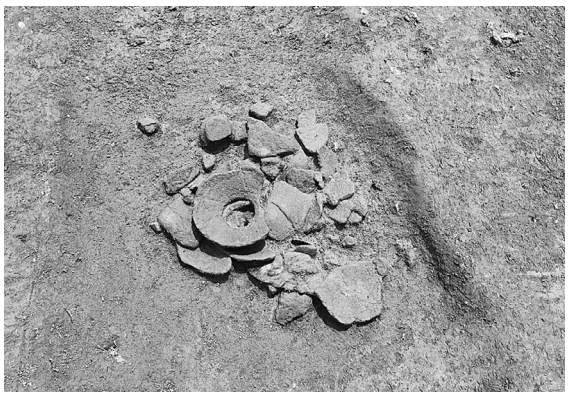
Ca 区 060SK (西から)



Ca 区方形周溝墓　（北から）



Ca 区方形周溝墓　（南から）



Ca 区方形周溝墓遺物出土状況　（西から）

岡山南遺跡（おかやまみなみ）

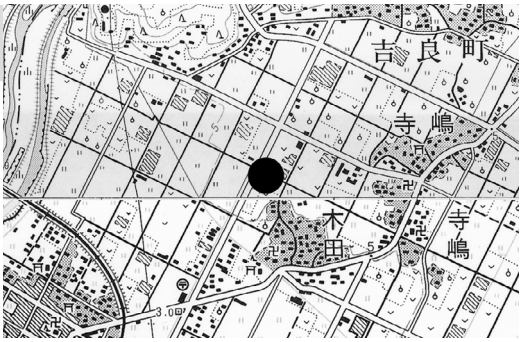
所　在　地　西尾市吉良町木田
(北緯34度50分14秒 東経137度4分40秒)

調 査 理 由　道路改良工事　一般県道西尾幡豆線

調 査 期 間　平成23年12月～平成24年2月

調 査 面 積　910㎡

担　当　者　池本正明



調査地点（1/2.5万「西尾・吉田」）

調査の経過　県道西尾幡豆線改良工事に先立つもので、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

立地と環境　岡山南遺跡は矢作（古）川左岸の微高地状に位置している。周辺の遺跡としては、北側に所在する「岡山」と地元で通称される丘陵上に、弥生時代終末期を主体とする集落遺跡である中根山遺跡や、吉良八幡山古墳や若宮第１号墳をはじめとする前期～中期古墳が数基所在している。

調査の概要　調査区は中央に位置する水路によりA・B区に二分割して実施した。検出できた遺構は、江戸時代、奈良・平安時代、古墳時代に区分できるが、これらは特にB区で検出面の差にもなっており、上面から順に第１～３面と呼称している。

第1面は井戸・土坑・溝を確認した。このうち幅の狭い溝が主体となるが、分布は希薄となる。後述する旧河道はこの段階ではほぼ埋没しているが、B区ではこの上面から掘削された井戸（010SE）が確認できた。第2面はB区で２棟が切り合う竪穴建物を確認した。このうち残存状況が良好な030SIは、一辺5m程度となる。北辺中央には焼土や炭化物を含む土坑が確認できたが、この部分にカマドが設置されていたものと考えられる。第3面も検出できた遺構は希薄だが土坑・溝などがあり、幅20m程度の旧河道の両側に展開する。

調査区は微高地の端部に位置しており、遺跡の縁辺部と考えられる。出土遺物も多量とは言えないが、時期毎に特徴的な器種や、残存状況の良好な資料も含まれている。なお、旧河道の出土遺物にはローリングを著しく受けた弥生時代中期の資料も含まれており、当該期の遺構が近隣に存在している可能性もある。　（池本正明）


B区第２面全景　（西から）


B区竪穴建物　（南から）

惣作（そうさく）遺跡

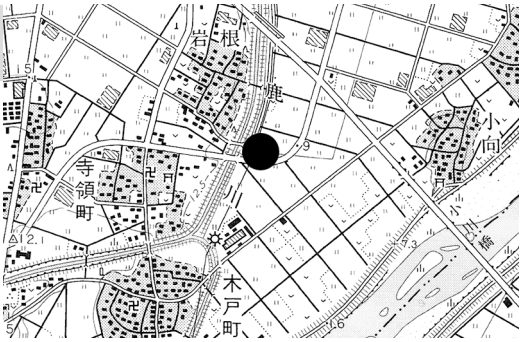
所　在　地　安城市木戸町
（北緯34度54分00秒 東経137度5分38秒）

調 査 理 由　床上浸水対策特別緊急事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成23年11月～平成24年１月

調 査 面 積　2,200㎡

担　当　者　松田 訓・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は、鹿乗川改修工事にかかる事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。当該遺跡は、これまでに当センターによって3度（平成16・20・21年度）発掘調査が実施され、近接して安城市教育委員会による発掘調査も1度実施されている。

立地と環境　遺跡は、安城市東部の鹿乗川とその左岸の沖積地上に展開する。現在の鹿乗川流路は碧海台地東縁崖下の南北を直線的に流れるが、これまでの発掘調査で、古代以前は大きく蛇行していたことが判明しており、遺跡は旧流路とその周囲の自然堤防上に立地する集落遺構で構成される。集落遺構は弥生時代中～後期、古墳時代前期、古代のものが確認されている。

調査の概要　調査区は、鹿乗川とその東に併行する用水路との間にある通称「中堤」を対象として設定した。幅160m×長さ18mの対象地を南から11A・B区の順で調査した。ここでは調査の中心となった11A区の概要を報告する。

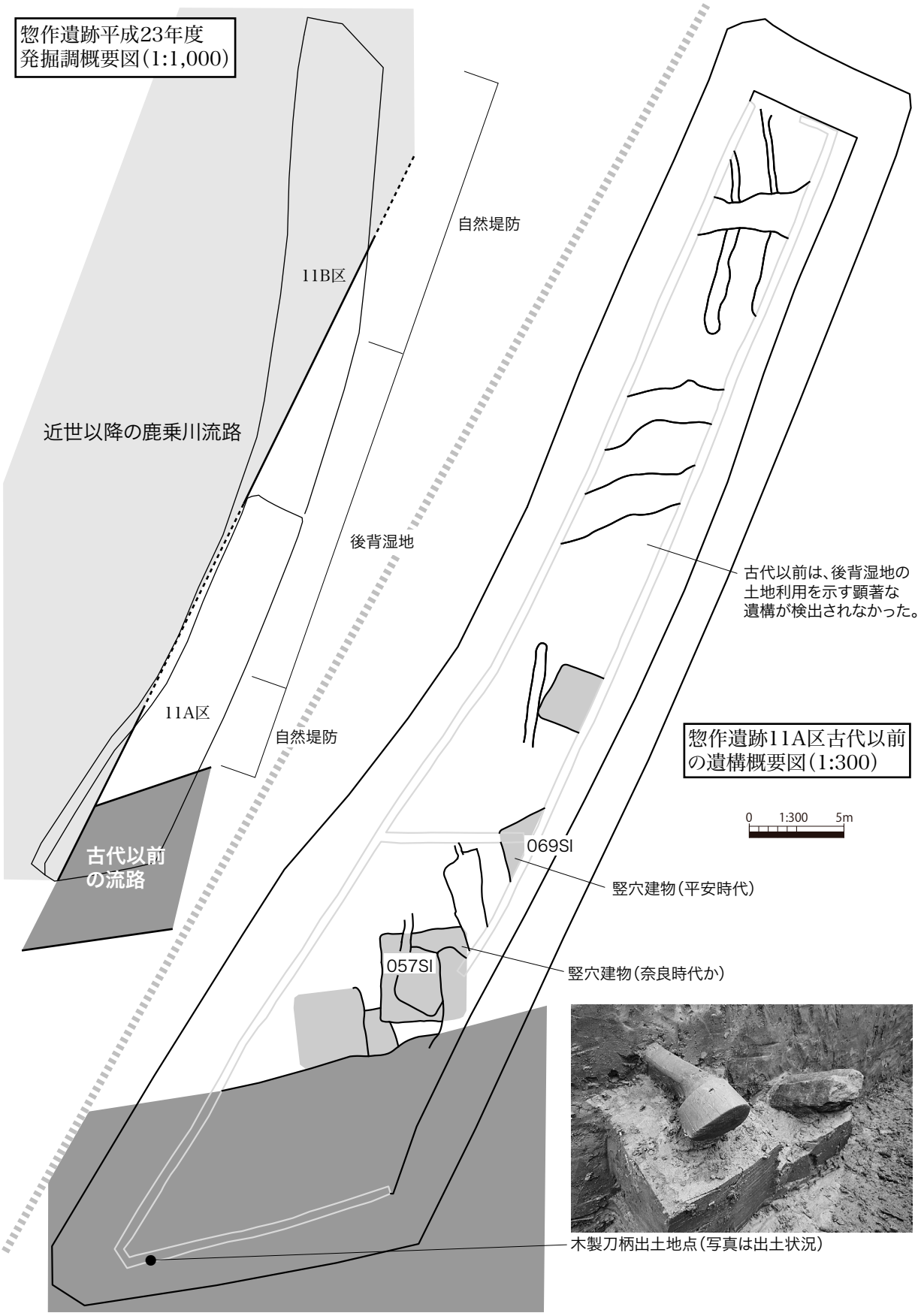
11A区では、調査区南端で流路堆積の一部を検出し、その北側で幅約20mの自然堤防の頂部、さらにその北側で後背湿地となる自然地形を検出した。

流路は概ね上下2層に区分され上層（黒褐色粘土層）で古墳時代前期から奈良時代までの遺物が、そして下層（灰色砂質シルト層）で古墳時代初頭の遺物がそれぞれ包含されていることを確認した。検出範囲はほぼ平らともいえる緩斜面で、調査区南壁でようやく傾斜角度が増している。なお下層より下は極細粒砂主体のラミナ状堆積で、弥生時代以前は水流のある川であったことがわかる。特記すべき遺物は、調査区南壁で出土した木製品刀柄で、古墳時代初頭～前期と考えられる。

自然堤防頂部では、奈良時代から平安時代の竪穴建物６棟を検出した。時期は、包含層での遺物出土状況から8世紀前半と9世紀後半に分けられる。後者（069SI）では墨書のある灰釉陶器も1点出土している。

後背湿地は古代以前の土地利用がほとんどなく、古代末期以降になって水田などの耕作地化が進んだようである。調査区ほぼ全体にみられる黒色粘土層中で畦畔状遺構が検出され、その直上で灰釉陶器・山茶碗が出土している。後背湿地は11B区の南半部まで続き、その北側で09C区でも検出された自然堤防頂部に至る。

近世以降の遺構は、直線化した鹿乗川に関わる土木工事の跡が検出され、杭や陶磁器・漆椀が出土している。　（永井邦仁）



惣作遺跡　平成 23 年度発掘調査の概要



惣作遺跡　11A 区全景（古代の遺構面 南から）



惣作遺跡　11A 区全景（中世の水田遺構 北から）

寄島（よせじま）遺跡

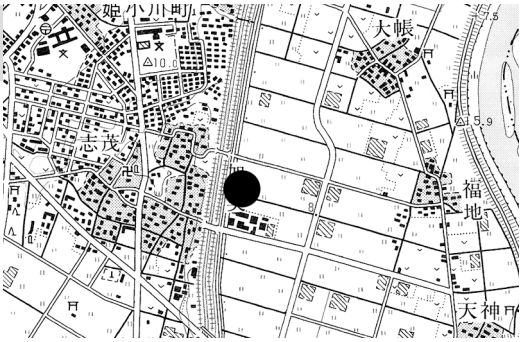
所　在　地　安城市小川町
（北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒）

調 査 理 由　交付金事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成23年５月～９月

調 査 面 積　2,135㎡

担　当　者　松田 訓・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は、鹿乗川改修工事にかかる事前調査として愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。当該遺跡は平成19年度にも発掘調査を実施しており、今年度はその南側から下懸遺跡までの2,135㎡が対象地となった。平成19年度の発掘調査では、古墳時代初頭を中心とする時期の集落遺構とその南側で方形周溝墓や古墳周溝と考えられる幅広の溝など遺構を検出しており、今回の調査でもそれらの検出が想定された。

立地と環境　遺跡は、碧海台地東縁下を南北に流れる鹿乗川流域の沖積地にあり、その東岸の自然堤防（標高約6.7m）に立地する。ただし鹿乗川の現流路は、江戸時代後半の村絵図に描かれている位置とほぼ同じであるが、それ以前の状況については不明な点が多い。実際に当センターの発掘調査では、平安時代後期までに埋没する流路が各遺跡で検出されており、それは現流路に対し大きく蛇行している。現在のところこれらが旧鹿乗川流路と考えられる。その後中世の流路は不明のままであるが、流路をはじめとする地形環境が一定ではなかったことが発掘調査によって判明しつつある。

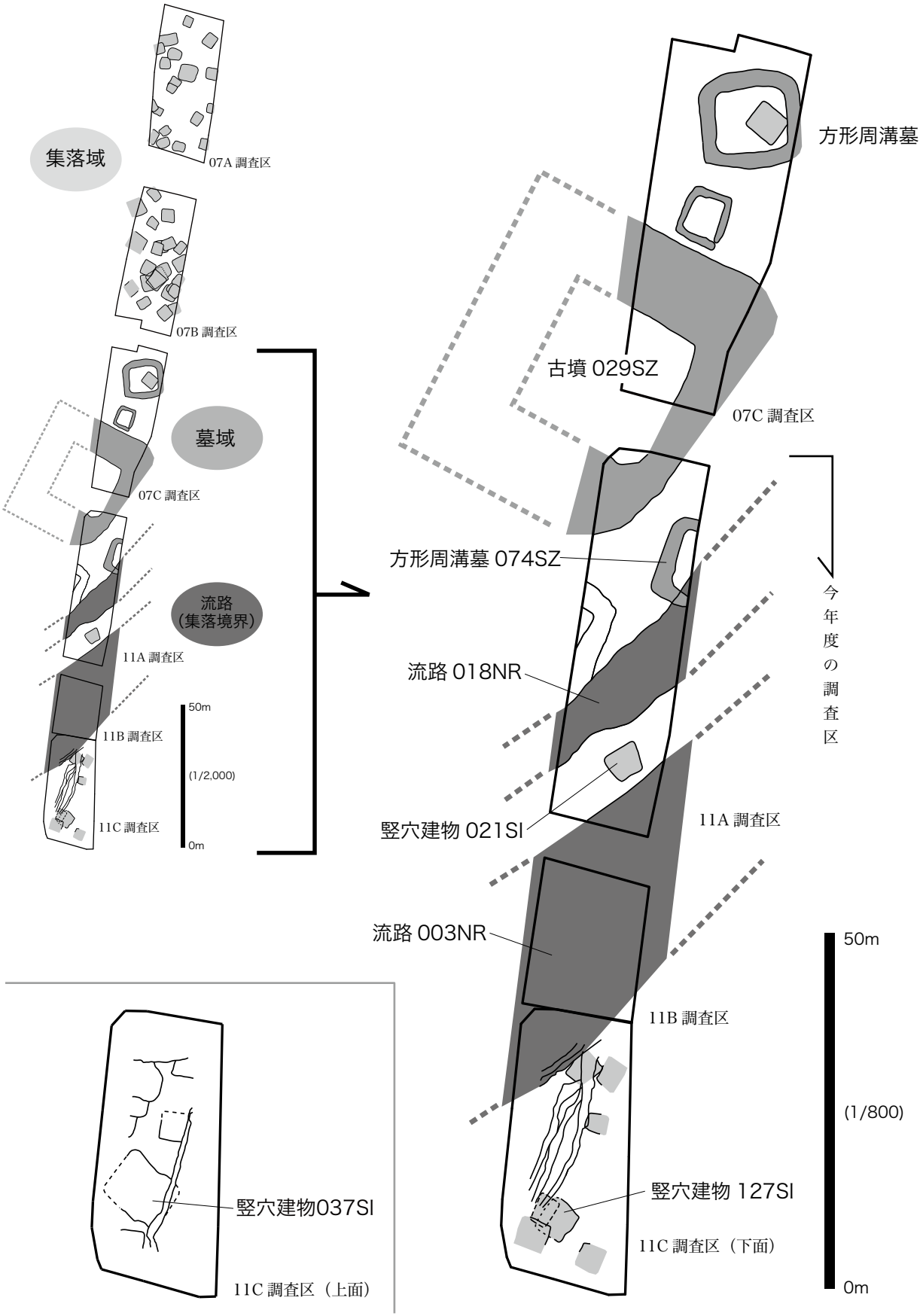
遺跡南側の下懸遺跡では弥生時代末期～古墳時代初頭に、同北側の姫下遺跡では古墳時代前期にそれぞれ最盛期となる集落遺跡が検出され、多数の土器・木製品が出土している。このことから、鹿乗川の旧流路沿いの自然堤防上に多数の集落が同時あるいは近接する時期に展開していたことがわかる。

調査の概要　調査区は北から11A～C区として設定した。それぞれで特徴的な遺構の検出状況となっており、調査区ごとに概要を示す。

11A 区　11A区は南北55mの調査区である。上記の幅広い溝の続きや、方形周溝墓1基、竪穴建物1棟、流路2条などが検出された。

方墳または前方後方墳　幅広の溝（029SZ）は撹乱を受けた部分が多かったが、その形状から方墳もしくは前方後方墳の周溝である可能性が高い。11A区では、墳丘の南東隅にあたる箇所が検出されており、先回の発掘調査（07C区）で検出された同北東隅までの長さは約40mである。これは方墳もしくは後方部の長さに相当する。溝の底面は概ね平らで、墳丘側の立ち上がりは非常に明瞭であった。その後長らく凹地になっていたとみられ、上層（黒褐色水成堆積層）からは山茶碗が出土している。しかしながら周溝掘削時に関わる遺物は寡少であり、その時期を特定するには至っていない。ただ、その南東側に位置する方形周溝墓を避けるようにして立地している点を踏まえると、墓域の中でも比較的最終段階に築造されたものと考えられる。

方形周溝墓　029SZの南東側に接するようにして方形周溝墓074SZが検出された。2カ所の隅部があり、一辺８m規模になると考えられる。周溝の深さは約80cmで、周溝からはほとんど遺物が出土しなかったが、重複して竪穴建物が検出されており、それより後になることが判明



寄島遺跡　平成 23 年度発掘調査の概要

している。

竪穴建物　調査区南部では竪穴建物021SIが、流路2条の間にある細長い自然堤防上で検出された。一辺が4.5mの正方形で壁溝と4本の柱穴を伴っている。ただし炉などの火処は検出されなかった。遺物も寡少で時期の特定はできていないが、概ね古墳時代前期以前と考えられる。

流路　調査区南端では、自然流路が機能低下し沼地状の堆積となった箇所が検出され、流路跡と認識した（001NR）。当該調査区内では顕著な出土遺物はみられなかった。またこの流路から自然堤防を挟んで北側13mの地点では、後背湿地の堆積が検出されこれも流路跡とした（018NR）。018NRでは併行する小溝群が検出され、湿地での耕作が行われていたものと考えられる。

11B区　11B区では調査区の大半を、11A区南端から続く自然流路の湿地状堆積が占めている。その幅は約22mで、下懸遺跡・惣作遺跡で検出された同様の遺構より規模は小さい。このことからこの流路は旧鹿乗川流路の本流ではなく、それに合流する支流であったと考えられる。

流路南岸付近ではその南側の自然堤防上に立地した集落から土器や木製品などが多数廃棄されており、それらが累積した状態で出土している。

土器は尾張地域の廻間1式後半段階を中心としており、高杯・壺・甕などがある。中には北陸地域に由来する口縁をもつ甕も出土している。このような土器組成や時期、他地域に系譜のある土器を含む点などは下懸遺跡出土土器の特徴そのものである。したがって当該遺構は下懸遺跡の一部として評価されるべきものといえよう。

木製の品も下懸遺跡の特徴と同様である。掘立柱建物などの建築部材が主体を占め、屋根の垂木とみられる材や梯子が数本出土したことなどが特筆される。しかしながらこれまでの下懸遺跡の調査ではわずかな掘立柱建物しか検出されておらず、さらなる高地での存在が期待される。

11C区　11C区は、自然堤防の頂部にあたり、特に調査区東側にむかってさらに高位傾向にある。そのため近世段階にはかなり削平を受けていたとみられ、竪穴建物などは調査区西半部で検出されている。

平安時代の集落　上位遺構面で検出された大小の竪穴建物は７棟ある。中でも037SIは一辺7.5mの規模でひと際大きい。しかしながらいずれも削平によって床面以下が残存するにとどまっている。その掘り方内からはK-90号窯期の灰釉陶器が出土していることから、平安時代中～後期のものと考えられる。これらの竪穴建物跡を切り込む遺構からは山茶碗とその上位包含層から戦国時代の土師器鍋が出土しており、中世以降も集落であった可能性が高い。鹿乗川流域の沖積地上ではそれほど多くの中世集落は確認されていないため注目される。また、竪穴建物に先行する奈良時代の遺物として桶巻き作りの丸・平瓦片が多数出土しており、遺構は検出されていないが瓦葺き建物が存在した可能性が考えられる。

弥生時代の集落　下位遺構面も削平により遺構の残存はわずかではあったが竪穴建物４棟やそれに先行する小溝群を検出した。竪穴建物の時期は出土遺物が少ないため特定しにくいが、北側の流路に廃棄された土器の時期に比定されると考えられる。最も先行する127SIは一辺4.8m規模で炉は伴なっていない。　（永井邦仁）



寄島遺跡　11B 区流路全景（南から）



寄島遺跡　11B 区流路の建築部材出土状況

宮下（みやした）遺跡

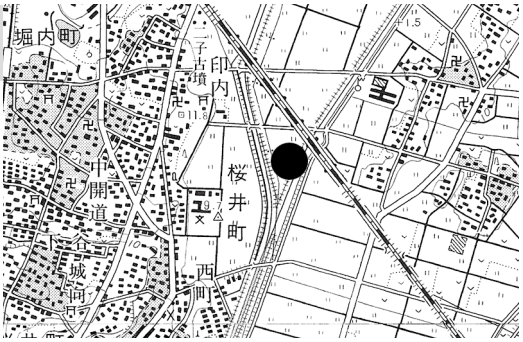
所　在　地　安城市桜井町小社
（北緯34度55分30秒 東経137度6分1秒）

調 査 理 由　交付金事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成23年9月

調 査 面 積　80㎡

担　当　者　松田 訓・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は、鹿乗川改修工事にかかる事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。当該遺跡は、これまでに安城市教育委員会によって数次の発掘調査がなされているが、今回の調査区はそこから東方へ約300mの地点にある。

立地と環境　遺跡は、碧海台地東縁下を南北に流れる鹿乗川流域の沖積地上に立地する。鹿乗東川と鹿乗西川の合流地点に位置し、西方の台地上には式内社である桜井神社が所在する。周辺沖積地上は、ほぼ全域が遺跡群として認識されており、弥生時代末期～古墳時代初頭に最盛期となる集落遺跡が多数存在する。

調査の概要　調査区は、鹿乗東川堤防に沿った南北に細長いトレンチ状である。地層は耕作土直下に耕地整理時の造成土、それ以前の耕作土および畦畔があり、その下で遺構面となる。深さは約0.8mである。

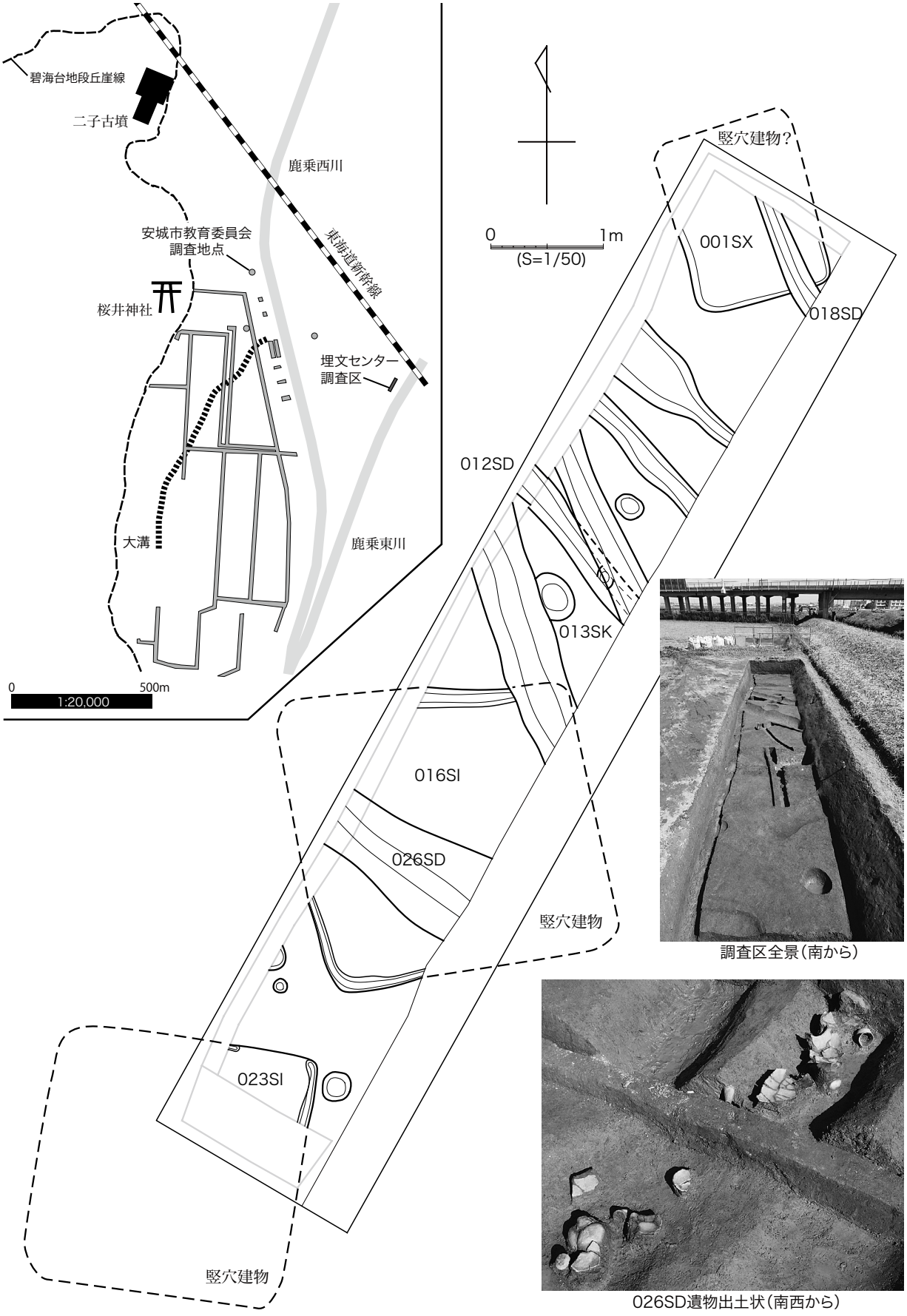
検出された主な遺構は、溝7条、竪穴建物2棟、土坑1基である。

溝026SDは北西～南東方向へ延びる幅0.8m深さ0.3mで、埋土の上層で土師器壺（小型壺）や高杯（屈折脚）が多数出土した。土師器は尾張地域の松河戸II式にほぼ併行し、古墳時代中期前葉に位置づけられる。もうひとつの溝012SDは、ほぼ垂直に掘り込まれすぐに埋められた状態を示しており、一部に柱穴痕を推測させる深い掘り込みも認められた。従って大壁建物や布掘りの掘立柱建物を想定しておきたいが、柱穴については明瞭な痕跡ではなくまた遺物もほとんどなかったことから確定的ではない。

竪穴建物016SIは溝026SDに先行することが切り合い関係から明らかとなった。一辺約3mの方形で壁溝がほぼ全周する。所属が明確な出土遺物がないことから時期不詳であるが、今回の調査区からは弥生土器の出土がなかたことから古墳時代前期に限定される可能性が高い。調査区北端の性格不明遺構001SXは小規模だが竪穴建物の可能性も考えられる。これは灰釉陶器が出土する小溝018SDに先行する。

土坑013SKからは土師器小型壺が出土した。時期は溝026SDと同じであると考えられる。

ま　と　め　今回の発掘調査では、溝026SD出土の古墳時代中期前葉の土師器が大半を占め、その他は7世紀代の須恵器や平安時代の灰釉陶器であった。この遺物相は安城市教育委員会の発掘調査成果でも認められるが、後者ではさらに弥生時代中期から古墳時代前期の遺物も潤沢であり、木製品が多数出土する大溝や墨書土器も存在する。今回の調査区はこれに比較して集落周縁部の様相をうかがわせる。これらの調査成果との比較を通じて遺跡群の全体像を見通していく作業が今後必要となってくるであろう。　（永井邦仁）



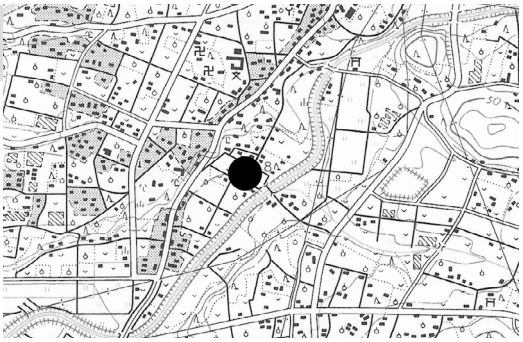
調査区全景（南から）

026SD遺物出土状（南西から）

図１　調査区全体図（1:50）

東下地遺跡（ひがししもじ）

所　在　地　豊橋市石巻本町東下地ほか
（北緯34度47分52秒 東経137度26分16秒）
調 査 理 由　道路改良工事（主）東三河環状線
調 査 期 間　平成23年５月～平成24年３月
調 査 面 積　10,630㎡
担　当　者　永井宏幸・川添和暁


調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　発掘調査は、主要地方道東三河環状線道路改良事業にかかわる事前調査で、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成23年5月から平成24年3月、調査面積は10,630㎡である。

立地と環境　東下地遺跡は神田川右岸と豊川左岸の河岸段丘に挟まれた低地に立地する。標高は17m前後である。周辺は遺跡が連綿と続く。なかでも東下地遺跡の西側に隣接する河岸段丘上は古墳群を含む弥生時代後期から古代・中世の高井遺跡が注目できる。

調査の概要　調査は、現況の道路を区切りにA・B・C・D・E区とし、実施した。以下、A区とB区の調査概要を中心に示す。

A区　中世から近世を中心とする遺構群が調査区全体にひろがり、古代以前と考えられる水田跡が調査区北西側を中心に展開する。

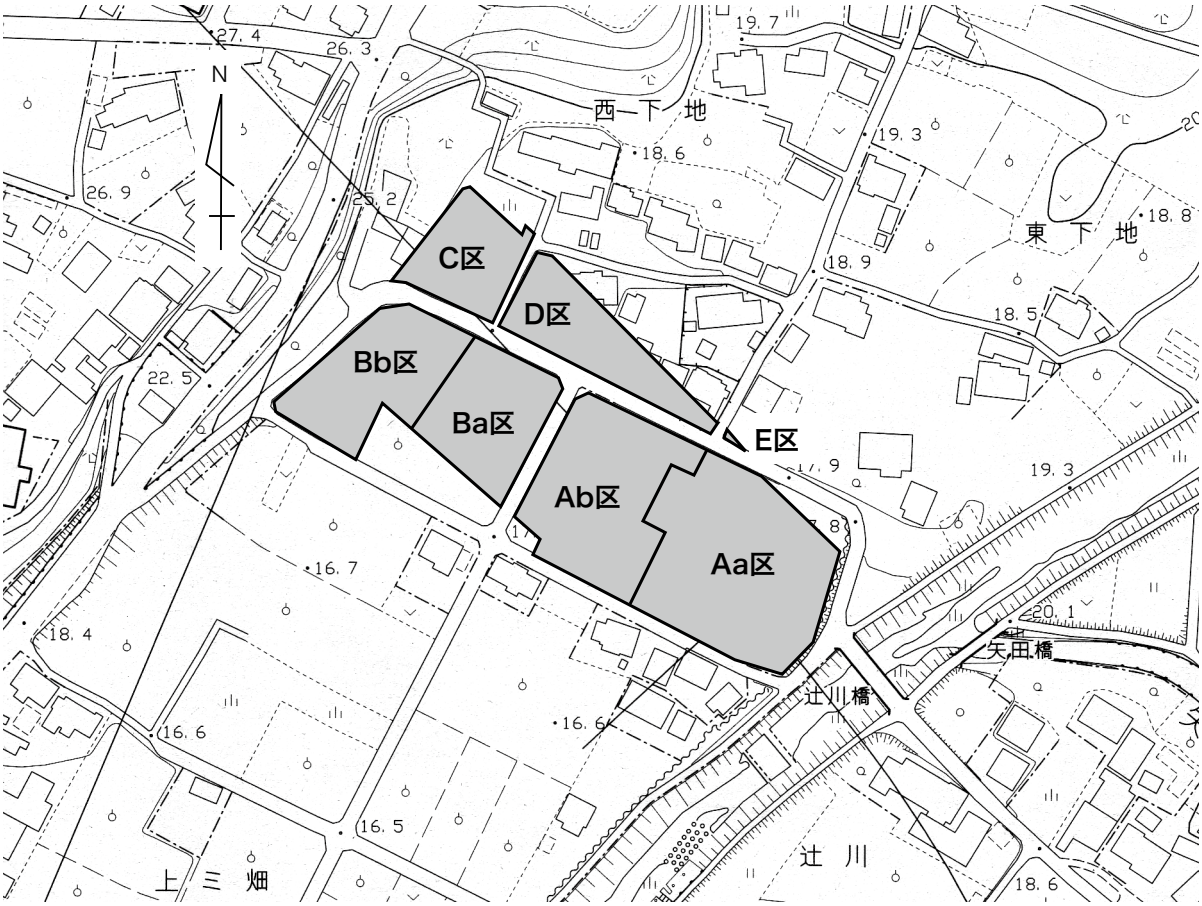


図１　東下地遺跡 調査区配置図（1:2,500）



写真 1　下面の水田跡

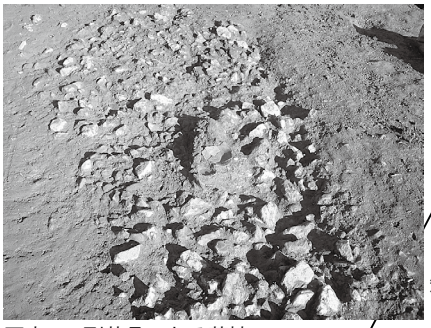


写真 2　副葬品のある墓壙



写真 3　柱穴群全体

写真 4　集石のある土壙

写真 5　流路遺物出土状態

図2　A区遺構全体図（1:500）

水田の調査　古代以前の水田跡は、A区の北西隅を中心に確認した。調査区全体に水田跡の確認できなかった理由としては、古代以降の砂礫層をともなった洪水性の堆積による削平がある。したがって、砂層と細礫層によって削平されずに覆われたところが偶然残存したと想定できる。時期比定が確定できない理由としては、Bb区で検出した畦畔から出土した土器が古墳時代と想定できる以外に、時期比定できる遺物がないからだ。堆積状況と畦畔の配置などから同時期である可能性もある。ただし、幾重にも重なる砂礫層が層順の根拠を混乱させているので、砂層と細礫層によって覆われた箇所を比較するだけでは確定できない。

畦畔の配置は、不定形で一面あたりの面積も３～８㎡で、小区画水田に相当する。畦畔が弧線を描くように緩やかに曲がるありかたが、地形を活かした配置になっている。

中世墓の調査　Ab区東寄りに幅5m、長さ10mの範囲に密集した集石を伴う土壙群がある。

当初は周辺の大礫層がシルト層の厚く堆積する上位に散在していると認識した。ところがこの土壙群の南端、すこし離れたところから不定形に広がる集石を検出した。大礫を除去すると短刀・山茶椀・山皿が重なって出土した。人骨は確認できなかったが、3.4×1.1mの礫敷土壙の上位に、1.5×0.5mの長楕円にシルト層があった。短刀などもこの堆積層から出土していることから、棺を想定したい。

この大型土壙検出をきっかけに、拳大くらいの礫が集積した箇所を精査したところ、25基の土壙を確認した。さらに隣接する箇所に、礫のない土壙も多数あり、都合40基以上の墓壙群となった。

柱穴群の調査　中世墓壙群の西側は細礫に覆われた小土坑を200箇所前後検出した。大きさは径20㎝前後、深さ50㎝ある比較的しっかりとした掘りかたの柱穴が多い。柱痕のあるものも含み、なかには柱の残欠と礎板を確認した柱穴もあった。

中世の河川跡　Ａａ区北東寄りに幅10m前後の蛇行する流路を確認した。検出時は土師器片などがほかの場所に比べて多い程度の認識であった。流路の深度を確かめるためトレンチを数カ所入れると、おもに流路西寄りから13世紀代を中心とする完形品の山茶椀をはじめ遺物の集中する所があった。さらに掘削を進めると、数カ所に大量の遺物投棄があった。なかでも入り江状になった所は大礫が敷かれたように集中し、そこに隣接して山茶椀・桃の種子などがまとまって出土した。

流路の堆積は下位に砂礫層がひろがる。その上位にシルト層が堆積し、とくに流路の岸辺を中心に遺物が出土した。土師器皿が相当量あり、山茶椀より多い。椀皿類を中心に、完形品が多く、使用頻度の高くないものが多い。墨書土器は数点出土している。猿投・瀬戸窯製品の椀・皿類が少量ある。

中世末から近世の溝群　神田川に近いＡａ区東寄りは川の本流部分である。表土近くから中・大礫を中心とした礫層が厚く堆積する。この礫層が途切れる付近に１m前後の段差がある。この段差を利用した縁辺に、溝群がある。とくに下段の溝は幅５m前後ある大溝であった。遺物は15世紀代の土師器鍋がまとまっている所を除くとあまりない。

そのほか、Ａａ区で検出した400基近い土坑などは、ほとんど遺物を含まない浅い掘り込みの遺構であった。土色と土質の明確な差異はない。したがって、人工的な掘り込みではない遺構も相当数ある。そのなかでも土師器皿が20枚程度完形品で出土した土坑、水晶の数珠玉と人骨が出土した土坑はＡｂ区の中世墓群との関連性が指摘できる。（永井宏幸）

B区　B区・C区は、遺跡西端の段丘下に設定した調査区である。西接する段丘はやや舌状に張

り出す形状を呈しており、Bb区中央部付近で最も張り出している。B区は対象面積が広いため、遺跡東側のBa区と西側のBb区に分けて調査を行った。

Ba区　Ba区の層序は、上から、Ⅰ層：表土（20～30cm）、Ⅱ層：黒褐色シルト（20～30cm）、Ⅲ層：砂礫層（最大70cm）、Ⅳ層：灰黄褐色シルト（約30cm）、Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト（5～10cm）、Ⅵ層：黄褐色シルトである。Ⅱ層は、調査区全面に広がりが確認できる。やや斑土状を呈する土壌で、ごくわずかに戦国期あるいは近世の陶器片が出土した。畑地など中近世の耕作土であったと考えられる。Ⅲ層は、調査区西側で特に厚い堆積を確認できたもので、西側に展開するにつれて層厚が著しく薄くなる。Ⅳ層は、後述するBb区の成果から、古墳時代の水田耕作土と考えられるが、この調査区では認識が至らず検出し得なかった。Ⅴ層はⅥ層（地山層）への漸位層の様相を呈する層である。この層で、本来ならばⅣ層に存在した水田畦畔の擬似畦畔と、弥生時代前期の土器群の出土をみた。擬似畦畔は5×5m以下の小区画である。弥生時代前期の土器片は自然地形の凹地あるいは自然流路内に土器片が散在している状態で見つかった。ヒトの活動痕跡かも知れないが、活動内容は不明である。

Bb区　Bb区の基本層序はBa区と同様であるが、段丘縁の西側区域とBa区から連続する東側区域とで、様相が大いに異なる。西側区域では、南北に走る大きな自然流路が見つかり、流路内のⅡ層相当層で、小規模な水田を検出した。また、Ⅲ層下の中洲状の低位の高まりでは、地山直上で水田耕作土と考えられる均質なシルト層を確認した。これは後述するC区の水田畦畔に対応するものと考えられる。一方、東側区域では、Ⅳ層上面で、極めて良好な状態で小区画水田を検出することができた。Ⅲ層の堆積が、水田畦畔をパックしていたためと考えられる。水田は配置・構成の異なる２面の水田（上面・下面）を確認できた。上面の水田は３×３m程度の小区画で東側区域全面にわたって見つかった。畦畔内の耕作土からは古墳時代前期から中期にかけての土器片がまとまって出土した。一方、下面の水田は、自然流路際に展開しており、溝・大畦畔・導水路・小区画水田をセットで確認することができた。また、下面水田脇のⅥ層直上では、土坑状の落ち込みと∩形を呈する溝が１セットとなった炉跡が３セット以上重複した状態で見つかった。　（川添和暁）



写真6　東下地遺跡　調査区遠景

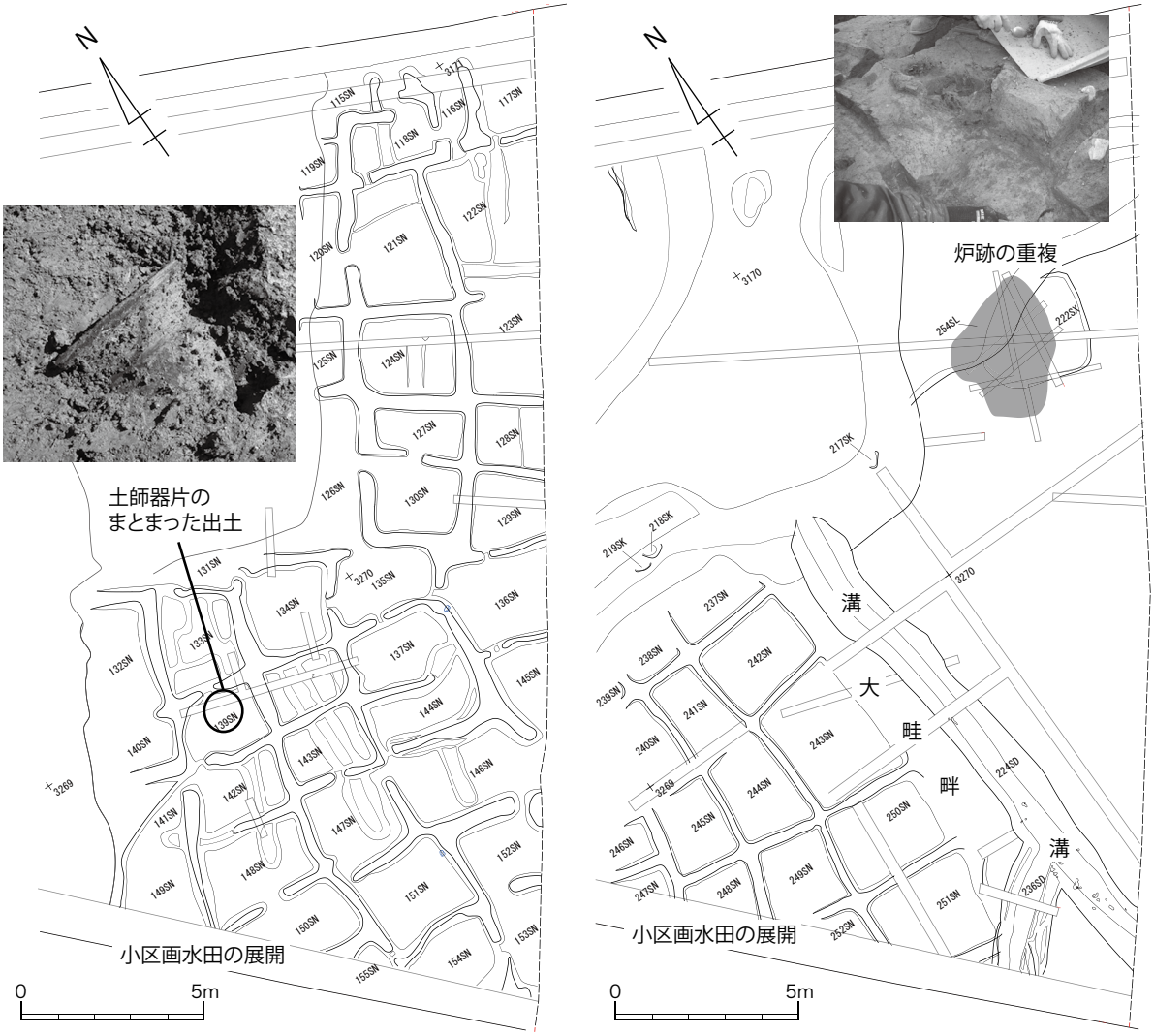


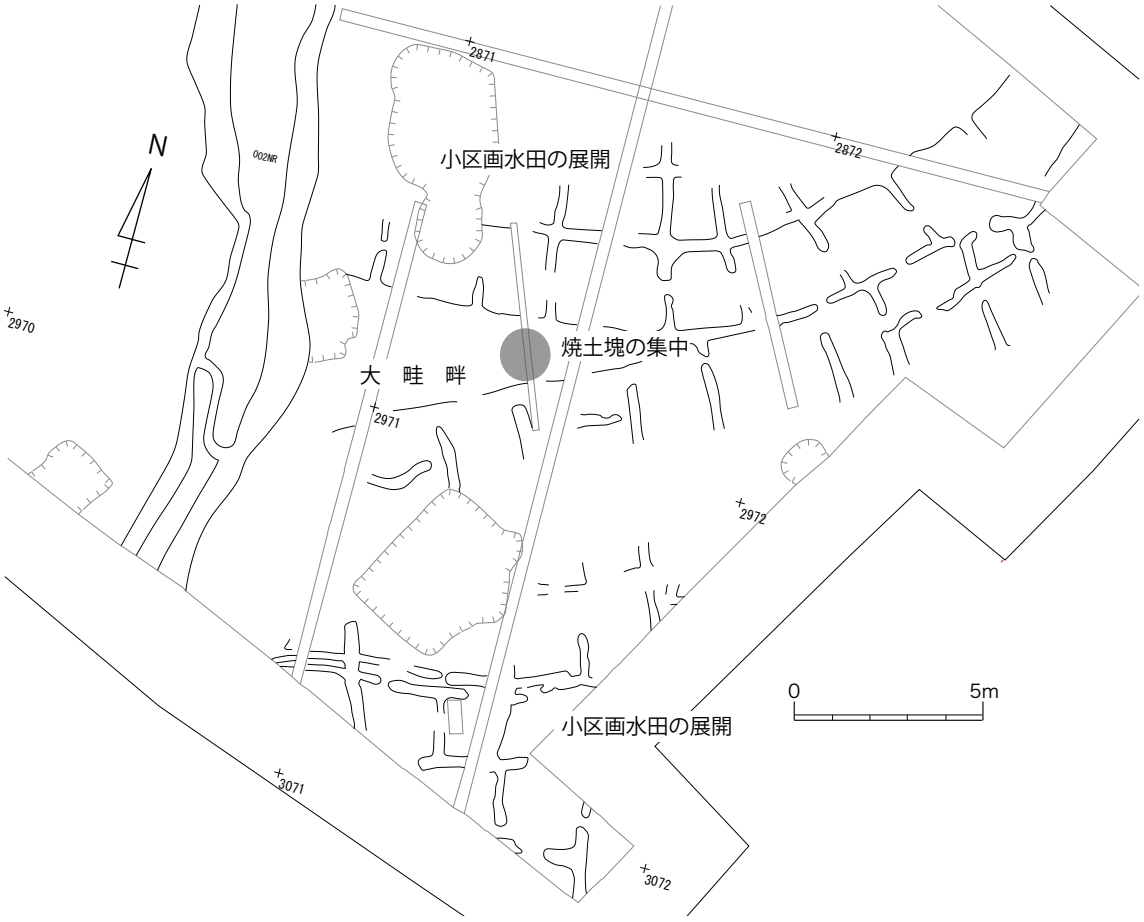
図3　Bb区水田検出状況（1/200）【左：上面、右：下面】



写真6　Bb区水田（上面）検出状況（東より）



写真7　Bb区水田（下面）検出状況（北より）



C区水田検出状況（1/200）

C区　遺跡北西端にあたる位置に設定した調査区である。段丘直下にあたる調査区西側では、Bb区西側区域同様、南北方向に走る自然流路が見つかった。自然流路東側では、北東から南西方向に、地形の傾斜に沿って小区画水田群を確認した。水田は数回営まれているようであるが、配置の変換点にあたる大畦畔状の場所に、焼土および炭化物が集中して出土した。（川添和暁）

D区　中世以降の堆積層は、全面にわたり礫層が覆う。何度も大量の礫をともなう流水性の堆積に削平された結果と考えたい。C区寄りの部分は畑地に相当する堆積があったものの、近代以降の遺物を含む堆積が下位にあった。古代以前の水田はこれら礫層の下位にある。南側に隣接するＡｂ区の水田、西側に隣接するC区の水田と同一層序である。自然地形に沿った小区画水田が調査区西寄りに広がる。（永井宏幸）

ま と め　段丘下の縁辺と神田川の氾濫原に相当する東下地遺跡の調査は、礫層の堆積を理解するのに難航した。縄文後晩期の土器石器、弥生前中期の土器石器、古代須恵器などが礫層から出土した。遺構を伴わない遺物はじつに幅広い時代を含む。

水田跡は古墳時代を中心とする小区画水田が良好に確認できた。砂礫層に覆われた水田は洪水性の堆積により削平されたところも多いが、段丘下縁辺の高低差をうまく利用した水田であった。Bb区では畦畔と水路の配置が異なる上下２面の水田を確認した。

Ａ区を中心とした13世紀代を中心とする墓壙群と柱穴群は、区画溝や井戸を伴わない。つまり中世集落跡の調査事例が屋敷地とする条件に欠ける。墓地とこれに関連する施設を想定したい。河川跡の大量投棄はこれを裏付ける。（永井宏幸）